

久しくまゐらぬ人に

光孝天皇御歌

君がせぬわが手枕はくさなれやなみだの露の夜なくぞ置く

御かへし

讀人しらず

露ばかりおくらむ袖はたのまれすなみだの川のたきつ瀬なれば

みちのくの安達に侍りける女に九月ばかりに遣はしける

重之

思ひやるよそのむら雲しぐれつゝあだちの原に紅葉しぬらむ

思ふ事侍りける秋の夕暮ひとりながめてよみ侍りける

六條右大臣室

身に近くきけるものを色かはる秋をばよそに思ひしかども

題しらず

相摸

いろかはる秋のした葉を見てもまづ人の心の秋ぞ知らるゝ

稻妻は照らさぬ宵もなかりけりいづらほのかに見えしかけろふ

謙徳公

謙徳公

ひと知れぬ寐覺の涙ふりみちてさもしぐれつる夜半のそらかな

光孝天皇御歌

光孝天皇御歌

涙のみうき出づる蟹の釣竿のながき夜すがら戀ひつゝぞぬる

坂上是則

坂上是則

○くさなれや 草であるのだからか。

○露ばかり 露ほの少しばかり

○たのまれず 頼みにならない

○なみだの川のたきつ瀬なれば 君を思ふ涙は瀬の瀬すから

○よそのむら雲しぐれつゝよそ心が出て私に心がはりしての意味

○身に近くきけるものを 我が身の上に近く来たものを

○よそに思ひしかどもよそ事に考へてゐたが

○稻妻はの歌 電光も霹靂も共に

にはかない物だが、電光は毎晩照らすのに霹靂はほのかに見えただけの意味。霹靂をつれなくなた人に喩ふ。

○さもしほども

○うき出づる 海人が海底から浮び出ること涙の浮き出ることを云ひ懸く。

○釣竿の 釣竿のやうに。

久しくまゐらぬ人に

光孝天皇御歌

君がせぬわが手枕はくさなれやなみだの露の夜なくぞ置く

御かへし

讀人しらず

露ばかりおくらむ袖はたのまれすなみだの川のたきつ瀬なれば

みちのくの安達に侍りける女に九月ばかりに遣はしける

重之

思ひやるよそのむら雲しぐれつゝあだちの原に紅葉しぬらむ

思ふ事侍りける秋の夕暮ひとりながめてよみ侍りける

六條右大臣室

身に近くきけるものを色かはる秋をばよそに思ひしかども

題しらず

相摸

いろかはる秋のした葉を見てもまづ人の心の秋ぞ知らるゝ

稻妻は照らさぬ宵もなかりけりいづらほのかに見えしかけろふ

謙徳公

謙徳公

ひと知れぬ寐覺の涙ふりみちてさもしぐれつる夜半のそらかな

光孝天皇御歌

光孝天皇御歌

涙のみうき出づる蟹の釣竿のながき夜すがら戀ひつゝぞぬる

坂上是則

坂上是則

○しづむ 上の「浮く」に對する詞

○おもほえず 思ひもかけず。

○もろこし舟の寄りしばかりに 伊勢物語では、五條なる女をえ得ずとてまぶらへる人に返したる歌で、「寄りし」はその人の訪れたことを云ふ。

○なみ 涙。無み。

○ねこそ泣かるれ 根こそ無かるれ。泣きこそ泣かるれ。

○なびかめや 靡かうかい。

○けに 殊に。この歌伊勢物語に。

○憂きながらの歌 伊勢物語に。

○隠れなむ 隠れたい。

○石の中 清水は石の間から湧き出るもので斯う云ふ。

○雲の 雲のやうに。

○遠山鳥の 遠い山の山鳥のやうに、山鳥は晝は離離一所にあつても夜は山の尾を隔てて寝る故に、「よそに」を云ひ起す序。

まくらのみ浮くと思ひしなみだ川いまは我が身のしづむなりけり

讀人しらず

おもほえず袖にみなとの騒ぐかなもろこし舟の寄りしばかりに

いもが袖わかれし日より白妙の衣かたしき戀ひつゝぞ寝る

逢ふことのなみの下草みがくれてしづごゝろなくねこそ泣かるれ

浦にたく藻鹽の煙なびかめや四方のかたよりかぜは吹くとも

わするらむと思ふ心の疑ひにありしよりけにものぞ悲しき

憂きながら人をばえしも忘れねばかつ恨みつゝなほぞこひしき

命をばあだなるものと聞きしかどつらきがためは長くもあるかな

いづ方に行き隠れなむ世の中に身のあればこそ人もつらけれ

いままでに忘れぬ人は世にもあらじ己がさまゝ年のへぬれば

玉水を手にもむすびてもこゝろみむぬるくば石の中もたのまじ

山城の井手の玉水手に汲みて頼みしかひもなき世なりけり

君があたり見つゝを居らむ伊駒やま雲なかくしそ雨はふるとも

中空に立ちる雲のあともなく身のはかなくもなりぬべきかな

雲のるる遠山鳥のよそにてもありとし聞けばわびつゝぞぬる

○我もしか 然一鹿。この歌大和物語に。

○夏野ゆく：角の序。
○つかのまも 少しの聞も。

○ならの小川 山城國。
○したに絶えじ 人に知られても心の下には絶えまいと。

○満ち来る潮の「の」は「思やうに」
○思ふか 思ふからか。
○浮島の これまでは序。

○見えし 夢が。

ひるは来てよるは別る、山鳥のかげみるときぞ音はなかれける
我もしかなきてぞ人に戀ひられし今こそよそに聲をのみ聞け

人 丸

夏野ゆく牡鹿の角のつかのまも忘れずぞ思ふ妹がこゝろを
なつぐさの露分ごころもきもせぬになどわが袖のかわくときなき

八代女王

御喫するならの小川のかは風に祈りぞわたるしたに絶えじと

清原深養父

うらみつゝ寝る夜の袖のかわかぬは枕のしたに潮や満つらむ

山口女王

中納言家持に遣はしける
葎べより満ち来る潮のいやましに思ふか君がわすれかねつる

赤染衛門

鹽竈のまへにうきたる浮島のうきて思ひのある世なりけり
題しらず

参議 篁

いかにねて見えしなるらむ假寝の夢より後はものをこそおもへ
うち解けてねぬもの故に夢を見てもの思ひまさる頃にもあるかな

伊勢

春の夜の夢にありつと見えつれば思ひたえにし人ぞ待たる、

伊勢

春の夜の夢のしるしは辛くとも見しばかりだにあらばたのまむ

盛明親王

ぬる夢に現のうさも忘れて思ひなぐさむほどぞはかなき

女御徽子女王

春の夜女の許にまかりて遣はしける

能宣朝臣

かくばかり寝で明しつる春の夜にいかに見えつる夢にかありけむ

寂蓮法師

題しらず

なみだ河身もうきぬべき寐覺かなはかなき夢の名残ばかりに

家隆朝臣

百首の歌奉りしに

あふとみて事ぞともなく明けにけりはかなの夢の忘れがたみや

基俊

題しらず

牀近くあなかま夜半のきりくす夢にも人の見えもこそすれ

皇太后宮大夫俊成

千五百番歌合に

あはれなりうたゝねにのみ見し夢のながき思ひにむすほほれなむ

○ありつと 二人の仲がつづいてゐたとき。

○思ひたえにし人 仲のすつかり絶えた人が。

○見しばかりむにあらはたのまむ 夢に見た程度のつれなきならはあの人を頼みに出来ようものを。

○ぬる夢に 寝て逢つた夢を見て現のうさ 現実のつれなき。

○寝で明しつる 寝ないで語り明した。

○いかに見えつる夢にか 寝ずに語り明したことを夢に見なしてゐる。

○明けにけり 一本「明けぬなり」

○牀近く 一本「牀近し」
○あなかま あゝやかましい。

○むすほほれ 心が結ばほれ。

題しらず

定家朝臣

○かきやりし 共に寝た夜掻きや
つた。
○うちふすほどは 打臥す程には

かきやりしその黒髪くろかみの筋すぢごとごとにうちふすほどは面影おもかげぞたつ

皇太后宮大夫俊成

○夢かきよ 夢かきよ。
○見しおもかけもちぎりしも 以
前に見た面影も又契つたのも。

夢かきよ見しおもかけもちぎりしも忘れずながら現うつならねば

式子内親王

○はかなくぞ知らぬいのちを歎き
こし 我が命の知り難きをはかな
くも歎いて来た。

はかなくぞ知らぬいのちを歎きこし我がかね言のかはりける世に

辨

○世々 前世のこゝ。

過ぎにける世々の契りもわすられていとふ憂身の果てぞはかなき

崇徳院に百首の歌奉りけるとき戀の歌

皇太后宮大夫俊成

○見し面影はさておきて 過去に
見た君の面影はさておいて。

おもひわび見し面影はさておきて戀せざりけむをりぞ戀しき

相摸

○もごめぬ 一本「冰らぬ」

流れ出でむ浮名にしばしよどむかなもとめぬ袖に淵はあれども

をとこの久しく音づれざりけるが忘れてかと申し侍りければよめる

馬内侍

○忘れなで 忘れないで。
○添へて 辛さに戀しさを添へて
○次第司 祭事の行列、往來の次
第などを司る役であらう。

つらからば戀しきことは忘れなで添へてはなどかしづ心なき

昔みける人賀茂祭の次第しだい司に出で立ちてなむまかり渡るといひて侍りけ

題しらず

定家朝臣

和歌所の歌合に遇不逢戀の心を

戀の歌とて

辨

崇徳院に百首の歌奉りけるとき戀の歌

題しらず

相摸

馬内侍

昔みける人賀茂祭の次第しだい司に出で立ちてなむまかり渡るといひて侍りけ

れは

藤原仲文

○君しまれ 君しもあれ。「し」は
助詞。
○樽 壁柱。
○朽木の袖 近江國甲賀郡。
○そまびとの これまで「くれ」
の序。
○くれ 樽一暮。

君しまれみちのゆききを定むらむ過ぎにし人をつ忘れつ、

年頃絶えにける女の樽くづといふもの尋ねたりけるにつかはすとて

大納言經信母

○おのづからさこそはあれと君
が訪れないのは心からではなく自
然故障などあつてのこと。

おのづからさこそはあれと思ふまに誠に人のとはすなりぬる

忠盛朝臣かれくになりて後いかゞ思ひけむ久しく音づれぬ事を恨めし

前中納言教盛母

○習はねは 慣れないので。
○悔しきに かやうな人に逢ひそ
めた後悔に。

習はねば人の問はぬもつらからで悔しきにこそ袖はぬれけれ

皇嘉門院尾張

○歎かじな 歎くまいな。
○人につらかりし 人につれなく
した。
○この世ながらのむくい 前世の
報いまでもなく。
○ありへは 有り經たならば。

歎かじな思へば人につらかりしこの世ながらのむくいなりけり

和泉式部

○つらきぞ長きかたみなりける
つらきこゝは長く忘れられないで
残るの意味。

嬉しくば忘るゝこともありなましつらきぞ長きかたみなりける

深養父

○つらきぞ長きかたみなりける
つらきこゝは長く忘れられないで
残るの意味。

嬉しくば忘るゝこともありなましつらきぞ長きかたみなりける

素性法師

○見てしかな 一本「得てしかな」

○あらぬかき 我が身がないのか

○葛城や岩橋の「絶え」の序 岩橋のことは前に出た。

○いまは古の歌 古今集卷十七に「古の野中の清水ぬるけれど元の心を知る人ぞ涙む」

○思ひな絶えを 思ひ絶えるなよ

○一つ松 我が一筋に思ふこころをよそへてゐるのであらう。

○出でていにし跡 自分が通ふ女の許から出て去つた跡。この歌伊勢物語に。

○梅の花 梅の花のやうに。

○大空に これまではおほつかなさを云ひ起す序。「の」は「のやうな」

○見てしかな 見たいな。

逢ふことのかたみをだにも見てしかな人は絶ゆとも見つゝ忍ばむ

わが身こそあらぬかとのみ迎らるれ問ふべき人に忘れしより 小野小町

葛城や久米路にわたす岩橋の絶えにし中となりや果てなむ 能宣朝臣

いまはとも思ひな絶えそ野中なる水のながれは行きてたづねむ 祭主輔親

おもひいづや美濃のを山の一つ松契りしことはいつも忘れず 伊勢

出でていにし跡だにいまだ變らぬに誰が通ひ路と今はなるらむ 業平朝臣

梅の花香をのみ袖にとめおきてわが思ふ人は音づれもせぬ 天曆御歌

あまの原そこもしろぬ大空におほつかなさを歎きつるかな 女御徴子女王

御かへし

なげくらむ心をそらに見てしかな立つあさ霧に身をやなさまし

○ながめ 眺め―長雨。

○しら雲の「知らず」を云ひ懸く

○知らせやはせぬ 知らせようかい。

○雲居より行く「聲ほのかなる」の序。

○くもなる鷹だに 雲の居る遙かにある鷹でさへ。

○かりには 鷹には一假には。○あらず 一本「あらず」

○初鷹の「はつかに」の序。

○小忌衣 五節の時の装束。

○去年ばかりこそ馴れざらめ「む」を補ふ。

○日陰 同じく五節の時に用ゐるもの。日陰篇。

○住吉のこひわすれ草 昔住吉にあつた戀を忘れるこひふ忘草が。

題しらず

逢はずしてふる頃ほひの数多あれば遙けき空にながめをぞする

女の外へまかるを聞きて 兵部卿致平親王

おもひやる心もそらにしら雲の出でたつ方を知らせやはせぬ 躬恒

題しらず

雲居よりとほ山鳥のなきて行く聲ほのかなる戀もするかな 延喜御歌

辨更衣ひさしく参らざりけるに給はせける

くもなる鷹だになきて来る秋になどかは人の音づれもせぬ 天曆御歌

齋宮女御春の頃まかり出でて久しく参り侍らざりければ

春行きて秋までとやは思ひけむかりにはあらず契りしものを 西宮前左大臣

題しらず

初鷹のはつかに聞きし言づても雲路に絶えてわぶる頃かな 藤原惟成

五節の頃内にて見侍りける人に又の年つかはしける

小忌衣去年ばかりこそ馴れざらめけふの日陰のかけてだにとへ 藤原元真

題しらず

住吉のこひわすれ草たね絶えてなき世にあへるわれぞかなしき

齋宮女御まゐりけるにいかなる事かありけむ

天曆御歌

水の上のはかなき数もおもほえず深きこゝろしそこにとまれば

久しくなりにける人の許へ

謙徳公

ながき世のつきぬ歎きの絶えざらば何にいのちをかへて忘れむ

題しらず

権中納言敦忠

心にもまかせざりける命もてたのめも置かじ常ならぬ世を

藤原元真

世の憂きも人のつらきも忍ぶるに戀しきこそ思ひわびぬれ

忍びてかたらひける女の親聞きていさめ侍りければ

参議 篁

数ならばかからましやは世の中にいとかなしきは賤のをだまき

題しらず

藤原惟成

人ならば思ふ心と言ひてましよしやさこそは賤のをだまき

讀人しらず

我がよはひおとろへ行けば白妙の袖のなれにし君をしぞおもふ

いまよりは逢はじとすれや白妙の我が衣手のかわくときなき

玉櫛たまぐしあけまくをしきあたら夜をころも手かれてひとりかも寝む

○水の上の歌 古今集卷十一に「行く水に数かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり」○そこ 底一其處。
○ながき世のつきぬ歎きの絶えざらば 長い後の世の盡きせぬ歎きが絶えないならば。
○たのめも置かじ常ならぬ世を 無常の世を頼み置くまい。

○戀しきこそ 戀しいことには
○数ならばかからましやは 我が身が相當の身分であつたならばかやうに女の親がいさめまいに。

○人ならば 情を知るべき人であるならば。
○よしやさこそは賤のをだまき よしやさやうに賤しい身分の女であつても。
○すれや すれはや。
○玉櫛たまぐし「あけ」の枕詞。
○あけまく 開け一明け。あけむこと。
○あたら夜を 惜しい夜を。

○露の置きかはる 春秋のおし移ることを云ふ。
○ほむけの風の 穂を一方に向けて吹く風のやうに。
○野もりの鏡 野に溜つた水鏡。
○えてしがな 得て映したいな。
○大淀のまつ云々 大淀の松(伊勢國にある)はつれなくもないのに。
○うらみて 恨みて一浦見て。
○こりずまの浦「戀りず」の意 味に須磨浦を云ひ懸く。

あふ事をおほつかなくて過すかな草葉の露の置きかはるまで

秋の田のほむけの風のかたよりに我はもの思ふつれなきものを

はし鷹の野もりの鏡えてしがな思ひ思はずそながら見む

大淀のまつはつらくもあらなくにうらみてのみも歸る浪かな

しら波は立ち騒ぐともこりずまの浦のみるめは刈らむとぞ思ふ

さして行くかたはみなとの浪高みうらみてかへる蟹の釣舟

新古今和歌集 卷第十六

雑歌上

入道前關白太政大臣の家の百首の歌よませ侍りけるに立春の心を

皇太后宮大夫俊成

とし暮れしなみだのつら、解けにけり昔の下にも春や立つらむ

藤原有家朝臣

土御門内大臣の家に山家殘雪といふ心をよみ侍りける

やまかけやさらでは庭に跡もなし春ぞ來にける雪のむらぎえ

一條左大臣

圓融院位さり給ひて後船岡に子の日し給ひけるに参りて朝に奉りける

圓融院御歌

あはれなりむかしの人をおもふには昨日の野邊にみゆきせましや

大僧正行尊

御かへし
ひきかへて野邊の景色は見えしかど昔をこふる松はなかりき

月あかく侍りける夜袖のぬれたりけるを

春來ればそでの氷も解けにけりもりくる月の宿るばかりに

月あかく 月が明るく。

○なみだのつら、袖にかゝつた涙が一面に氷つたもの。

○さらでは 雪の羣滑えがないでは。

○あかく 月が明るく。

○谷ふかみ 谷が深いので。

○色まどはせる 色を見惑はせる。わきて 辨別して。

○つひに咲きぬる 結局は咲いたこれに「遅れても大臣になつた」意味を云ひ懸く。

○延長 醍醐天皇の年號。

○百敷 大宮のこゝ。先代の宮中の有様を云ふ。

○みる人 上東門院を指すのであらう。

○あかく侍りける夜袖のぬれたりけるを

○春來ればそでの氷も解けにけりもりくる月の宿るばかりに

○ひきかへて野邊の景色は見えしかど昔をこふる松はなかりき

○御かへし

○あはれなりむかしの人をおもふには昨日の野邊にみゆきせましや

○圓融院位さり給ひて後船岡に子の日し給ひけるに参りて朝に奉りける

○土御門内大臣の家に山家殘雪といふ心をよみ侍りける

○とし暮れしなみだのつら、解けにけり昔の下にも春や立つらむ

○入道前關白太政大臣の家の百首の歌よませ侍りけるに立春の心を

○雑歌上

○新古今和歌集卷第十六

○雑歌上

○源公忠朝臣

○花山院御歌

○大貳三位

○東三條入道前攝政太政大臣

○東三條院女御におはしましけるとき圓融院つねに渡り給ひけるを聞き侍りてゆげひの命婦が許につかはしける

○うめの花なに勻ふらむみる人の色をも香をも忘れぬる世に

○色香をば思ひもいれず梅の花つねならぬ世によそへてぞ見る

○梅の花を見給ひて

○上東門院世をそむき給ひにける春庭の紅梅を見はべりて

○みる人 上東門院を指すのであらう。

○新古今和歌集卷第十六 雑歌上

○二〇一

○源公忠朝臣

○花山院御歌

○大貳三位

○東三條入道前攝政太政大臣

○東三條院女御におはしましけるとき圓融院つねに渡り給ひけるを聞き侍りてゆげひの命婦が許につかはしける

○うめの花なに勻ふらむみる人の色をも香をも忘れぬる世に

○かひもありけれ 住む效もあるの意味。

○むらさきの雲にもあらで 後の宮にもならないの意味。
○かひ 峽一效。

○昔みしの歌 伊勢物語に「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つは元の身にして」

○かきごしに 垣越しに。
○あだ人 左大将のことを云ふ。

○折りに來よ「折りに來いこ」に「折節に來いこ」を云ひ懸く。
○ありし 過去にあつた。

春霞たなびきわたるをりにこそかゝる山邊はかひもありけれ

御かへし

圓融院御歌

むらさきの雲にもあらで春がすみたなびく山のかひはなにぞも

柳

菅贈太政大臣

道の邊のくち木の柳はる來ればあはれむかしと忍ばれぞする

題しらす

清原深養父

昔みし春はむかしの春ながら我が身ひとつのあらずもあるかな

堀河院におはしましける頃閑院左大将の家の櫻を折らせにつかはすとて

圓融院御歌

かきごしに見るあだ人の家櫻はな散るばかり行きて折らばや

御かへし

左大将朝光

折りに來と思ひやすらむ花櫻ありしみゆきの春を戀ひつゝ

高陽院にて花の散るを見てよみ侍りける

肥後

よろづ代をふるにかひある宿なれやみ雪と見えて花ぞちり來る

かへし

二條關白内大臣

枝ごとの末までにほふ花なれば散るもみ雪と見ゆるなるらむ

○みゆきになる、左近衛の中少將は行幸の時に風堂に乗御の閑階下の櫻樹の下に立つので云ふ。

○なごしら河の なぞ知らなかつたかの意味を白河に云ひ懸く。

○建久 後鳥羽天皇の年號。

○ふるさと 奈良は舊い都なので云ふ。

○花の春さも 花の春であるさいふこも。

○けふこそは見え 今日はじめて見る。

近衛づかさにて年久しくなりて後うへのをのことも大内の花見にまかれりけるによめる

藤原定家朝臣

春を經てみゆきになるゝ花のかけふりゆく身をもあはれと思ふ

最勝寺の櫻は鞠のかゝりにて久しくなりしをその木年ふりて風に倒れ

たる由聞き侍りしかばをのこともにおほせてこと木をその跡に移し植ゑ

させし時まかりて見侍ればあまたの年々暮れにし春まで立ちなれけるこ

となど思ひ出でてよみ侍りける

藤原雅經朝臣

なれ／＼て見しはなごりの春ぞともなしら河の花のした陰

建久六年東大寺供養に行幸の時興福寺の八重櫻盛りなりけるを見て枝に

結びつけ侍りける

讀人しらす

ふるさとと思ひなはてそ花櫻かかるとみゆきに逢ふ世ありけり

籠り居て侍りける頃後徳大寺左大臣白河の花見に誘ひければまかりてよ

み侍りける

源師光

いさやまだ月日の行くも知らぬ身は花の春ともけふこそは見え

敦道のみこの許に前納言公任の白河の家にまかりて又の日みこの遣は

しける使につけて申し侍りける

和泉式部

○折る人 公任を指す。
○それなるからに さすがに高貴
な人なので。
○あぢきなく見し これまでつま
らなく見た。
○見まくのほしかりし 見むこま
の欲しかつた。見たかつた。

○甌新成櫻花 作り花のごと。

○さもあらはあれ暮れ行く春も
この二句は前後して譯す。

○春の友 花の散ることは春の友
といふ意味であらう。

○つねならぬ世 無常の世。
○このみ 木の實！此の身。

折る人のそれなるからにあぢきなく見し我が宿の花のかぞする

題しらず

藤原高光

見ても又またも見まくのほしかりし花のさかりは過ぎやしぬらむ

よみ侍りける

堀河左大臣

老いにける白髪も花ももろとも今日のみゆきに雪とみえけり

後冷泉院の御時御前にて甌新成櫻花といへる心ををのこどもつかうまつ
りけるに

大納言忠家

櫻花折りて見しにも變らぬに散らぬばかりのしるしなりけり

大納言經信

さもあらはあれ暮れ行く春も雲の上に散ることしらぬ花し勻はば

大納言忠教

無風散花といふことをよめる

さくら花すぎゆく春の友とてや風のおとせぬ世にも散るらむ

鳥羽院御歌

をしめどもつねならぬ世の花なれば今はこのみを西にもとめむ

○宿のものとも 宿のものとして
も。

○かかる 斯やうな。

○ながらの山 近江國滋賀郡の長
良山。

○さもあらはあれ まよ。
○恨めしの身や 俗念を以て眺め
たまは恨めしい身よ。

○いづちかもせむ せうしようぞ

○心はおくる 心だけは送る。

世をのがれてのち百首の歌よみ侍りけるに花の歌とて

皇太后宮大夫俊成

いまはわれ吉野のやまの花をこそ宿のものとも見るべかりけれ

入道前關白太政大臣の家の歌合に

春來ればなほこの世こそ忍ばるれいつかはかかる花を見るべき

同じ家の百首の歌に

照る月も雲のよそにぞ行きめぐる花ぞこの世の光なりける

春のころ大乘院より人に遣はしける

前大僧正慈圓

見せばやな志賀の辛崎ふもとなるながらの山の春のけしきを

題しらず

柴の戸に勻はむ花はさもあらはあれ眺めてけりな恨めしの身や

西行法師

世の中を思へばなべて散る花の我が身をさてもいづちかもせむ

東山に花見にまかりて侍るとこれかれ誘ひけるをさしあふ事ありてと

どまりて申し遣はしける

安法法師

身はとめつ心はおくるやまさくら風のたよりに思ひおこせよ

題しらず

俊頼朝臣

○さくらあさ 櫻。麻の一種。
をふ 麻生。伊勢國。

○すまのまつ山 奥州。

○たけくま 武隈。陸前國。

○呼子鳥 郭公鳥のこまか。

○枯れ行く 一本「枯れにし」

○すべらぎ 天皇。「き」に「木」を
云ひ懸く。

○九重 宮中。上の八重に對する

さくらあさのをふの浦波立ちかへり見れどもあかず山梨のはな
橋爲仲朝臣みちのおくに侍りけるととき歌あまたつかはしける中に 加賀左衛門
しら波の越ゆらむするのまつ山は花とや見ゆるはるの夜の月
おほつかな霞立つらむたけくまのまつのくまもる春の夜の月
題しらず

法印 幸清

世をいとふ吉野のおくの呼子鳥ふかき心のほどやしるらむ

前大納言 忠良

をりに逢へばこれもさすがにあはれなり小田の蛙の夕暮の聲

有家 朝臣

千五百番歌合に

春の雨のあまねき御代を頼むかな霜に枯れ行く草葉もらすな

八條前太政大臣

崇徳院にて林下春雨といふ事をつかうまつりけるに

すべらぎの木高き陰にかくれてもなほ春雨にぬれむとぞおもふ

實方 朝臣

圓融院位去り給ひし後實方朝臣馬命婦と物語し侍りけるととき山吹の花を

實方 朝臣

屏風の上よりなげこし給ひて侍りければ

八重ながらいろもかはらぬ山吹のなど九重に咲かずなりにし

圓融院 御歌

御かへし

○いはぬ色 山吹は「口なし色」
(黄色)なので云ふ。

○おのが波 藤浪。

○田子 農夫。沈湎する自身を云
ふ。田子の浦は越中國。

○祭の日 賀茂神社の祭。

○いつき 齋院。

○そのかみ山 「その當時」を「其
の神山」に云ひ懸く。神山は賀茂。
○ほの ぼのかに。
○かんだち 神館。前に出た。

このへにあらで八重咲く山吹のいはぬ色をばしる人もなし

五十首の歌奉りし時

前大僧 正慈圓

おのが波におなじ末葉ぞ萎れぬる藤咲く田子のうらめしの身や

世をのがれて後四月一日上東門院太皇太后宮と申しけるととき衣がへの御

装束奉るとて 法成寺入道前關白太政大臣

唐衣はなのたもとに脱ぎかへよわれこそ春の色はたちつれ

御かへし

上東門院

から衣たちかはりぬる春の夜にいかでか花のいろを見るべき

四月祭の日まで花ちり残りて侍りける年その花を便の少將のかざしに給

ふ葉にかきつけ侍りける

紫式部

神代にはありもやしけむさくら花けふのかざしに折れるためしは

いつきの昔を思ひ出でて

式子内親王

ほとゝぎすそのかみ山の旅枕ほのかたらひし空ぞわすれぬ

左衛門督家通中將に侍りけるととき祭の使にてかんだちにとまりて侍りけ

る曉齋院の女房の中よりつかはしける

讀人しらず

立ち出づるなごりありあけの月かけにいとゝかたらふ郭公かな

左衛門督家通

いく千世と限らぬ君の御代なれどなほ惜しまるゝ今朝のあけほの

三條院の御時五月五日菖蒲の根をほとゝぎすのかたに作りて梅の枝にす

ゑて人の奉りて侍りけるをこれを題にて歌つかうまつれと仰せられけれ

ば 三條院女藏人左近

梅が枝にをりたがへたる時鳥こゑのあやめも誰かわくべき

五日ばかり物へまかりける道にいと白くくちなしの花咲けりけるをこれ

は何の花ぞと人にとひ侍りけれど申さざりければ 小 辨

うちわたすをち方びとにこと問へば答へぬからにしるき花かな

さみだれ空はれて月あかく侍りけるに 赤染衛門

五月雨のそらだにすめる月かけに涙のあめは晴るゝ聞もなし

述懐百首の歌の中に五月雨 皇太后宮大夫俊成

五月雨はまよの軒端の雨そゝぎあまりなるまで濡るゝ袖かな

題しらず 花山院御歌

ひとりぬる宿のとなつ朝な／＼なみだの露にぬれぬ日ぞなき

贈皇后宮に添ひて春宮にさぶらひけるととき少將義孝久しく参らざりける

○をりたがへたる 折時節を違へた。

○あやめ 菖蒲一文字。

○うちわたすの歌 古今集卷十九に「打渡す遠方人にも申すわれそのそこに白く咲けるは何の花ぞも」

○まや 兩下屋。前に出た。

○雨そゝぎ「あまり」の序。

○こなた 「常夏の花」に「牀」を云ひ懸く。

左衛門督家通

いく千世と限らぬ君の御代なれどなほ惜しまるゝ今朝のあけほの

三條院の御時五月五日菖蒲の根をほとゝぎすのかたに作りて梅の枝にす

ゑて人の奉りて侍りけるをこれを題にて歌つかうまつれと仰せられけれ

ば 三條院女藏人左近

梅が枝にをりたがへたる時鳥こゑのあやめも誰かわくべき

五日ばかり物へまかりける道にいと白くくちなしの花咲けりけるをこれ

は何の花ぞと人にとひ侍りけれど申さざりければ 小 辨

うちわたすをち方びとにこと問へば答へぬからにしるき花かな

さみだれ空はれて月あかく侍りけるに 赤染衛門

五月雨のそらだにすめる月かけに涙のあめは晴るゝ聞もなし

述懐百首の歌の中に五月雨 皇太后宮大夫俊成

五月雨はまよの軒端の雨そゝぎあまりなるまで濡るゝ袖かな

題しらず 花山院御歌

ひとりぬる宿のとなつ朝な／＼なみだの露にぬれぬ日ぞなき

贈皇后宮に添ひて春宮にさぶらひけるととき少將義孝久しく参らざりける

○露だに 少しばかりでも。

○おもひあらは 螢のやうに思ひ(火)があるならば。

○露はたもこにまがふかと 伊勢物語に「我や来る露や紛ふこおもふまであるは涙の降るにぞ有りける」

○袖のうら 出羽國。

○涙のふる 喜涙の降る。

○見しやそれともわかぬまに 過去に見た人はそれとも見分けな

い間に 久しぶりに廻り逢つてす

三條院御歌

に撫子の花につけてつかはしける

恵子女王

よそへつゝ見れど露だになくさますいかにかすべき撫子の花

月あかく侍りける夜人の螢をつゝみて遣はしたりければ雨降りけるに申

し遣はしける 和泉式部

おもひあらば今夜の空はとひてまし見えしや月のひかりなりけむ

題しらず 七條院大納言

思ひあれば露はたもとにまがふかと秋のはじめを誰に問はまし

后宮より内にあふぎ奉り給ひけるに 中 務

袖のうらなみ吹きかへす秋風に雲のうへまで涼しかるらむ

業平朝臣の装束つかはして侍りけるに 紀有常朝臣

秋やくる露やまがふと思ふまであるは涙のふるにぞありける

早くよりわらは友だちに侍りける人の年頃へて行き逢ひたるほのかにて

七月十日頃月にきほひて歸り侍りければ 紫 式 部

廻り逢ひて見しやそれともわかぬまに雲かくれにし夜半の月かな

みこの宮と申しけるととき少納言藤原統理年頃なれつかうまつりけるを世

を背きぬべきさまに思ひ立ちけるけしきを御覽じて

○月影の 月光のやうに。
○山の端わけてかくれなほ 出家
したならはの意味。

月影の山の端わけて隠れなほをむくうきよをわれやながめむ

題しらす

藤原爲時

山の端を出でがてにする月待つとねぬ夜のいたく更けにけるかな

参議正光臘月夜に忍びて人の許にまかりけるを見あらはして遣はしける

浮雲は立ちかくせども隙もりて空ゆく月の見えもするかな

伊勢大輔

かへし

参議正光

○思ひしか「む」を補ふ。

うきぐもに隠れてとこそ思ひしかねたくも月の隙もりにける

三井寺にまかりて日頃過ぎて歸らむとしけるに人々なごり惜しみてよみ

侍りける

刑部卿範兼

月をなど待たれのみすと思ひけむけに山の端は出でうかりけり

山里に籠り居て侍りけるを人のとひて侍りければ

法印静賢

おもひ出づる人もあらしの山の端にひとりぞ入りし有明の月

八月十五夜和歌所にてをのことも歌つからまつり侍りしに

民部卿範光

和歌の浦に家の風こそなければども波ふくいろは月に見えけり

和歌所の歌合に湖上月明といふことを

宜秋門院丹後

○待たれのみすと思ひけむ 待た
れはかりすると思つたのだから。
○出でうかりけり 出雲さものな
のを。
○あらし あらし嵐。

○家の風こそなければども 歌道の
家を離れたいものではないけれども
○波ふくいろ 風が波をふいて立
つ浪色。

○おもひも入らじ 佛道に思ひ入
るまい。
○こてもかくてもありあけの月
ごうしてもかうしても世には有る
のだから。これに在明の月を云ひ
懸く。
○永治 崇徳天皇の年號。
○雲居の月 宮中で見た月。
○雲居の月 へだてて來し身を 殿
上が出来ずに來た身を。「月は」
一本の「こ」ある。
○文治 後鳥羽天皇の年號。
○三代のむかし 後鳥羽天皇より
三代前。高倉天皇の時。
○雲の上の月 雲居の月と同じ。
○むかし見し 二條天皇の代に宮
中で見た。

○なほ 一本「また」
○袂に契る 袂の涙に宿る月に約
束する。
○のこれる 一本「こもれる」

よもすがらうら漕ぐ舟はあともなし月ぞのこれるしがの辛崎

題しらす

藤原盛方朝臣

山のはにおもひも入らじ世の中はとともかくてもありあけの月

永治元年讓位近くなりて夜もすがら月を見てよみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

忘れじよわするなどだにいひてまし雲居の月の心ありせば

崇徳院に百首の歌奉りけるに

左近中將公衡

いかにして袖にひかりの宿るらむ雲居の月はへだて來し身を

文治のころほひ百首の歌よみ侍りけるに述懐歌とてよめる

二條院讚岐

心にはわするゝときもなかりけり三代のむかしの雲の上の月

百首の歌奉りけるととき秋の歌

藤原經通朝臣

むかし見し雲居をめぐる秋の月いま幾とせか袖にやどらむ

月前述懐といへる心をよめる

藤原長能

うき身世にながらへばなほ思ひ出でよ袂に契るありあけの月

石山に詣で侍りて月を見てよめる

躬恒

みやこにも人や待つらむ石山の峯にのこれる秋の夜の月

題しらす

躬恒

○あは 彼(ア)れはの意味に淡くの意味を云ひ懸く。「あはれ」に「阿波の門(ト)」を云ひ懸く。

淡路にてあはとはるかに見し月のちかき今宵はところからかも
月のあかりける夜あひ語らひけり人の此の頃月は見るといへりけれ
ばよめる

源 道 濟

いたづらに寝てはあかせど諸共に君がこぬ夜の月は見ざりき

増 基 法師

夜更くるまでねられず侍りければ月の出づるをながめて

讀 人 し ら ず

天の原はるかにひとり眺むればたもとに月の出でにけるかな

攝 政 太 政 大 臣

能宣朝臣大和國まつちの山近く住みける女の許に夜更けてまかりて逢は

前 大 僧 正 慈 圓

ざりけるを恨み侍りければ

藤 原 業 清

たのめこし人をまつちの山の端に小夜ふけしかば月も入りにき

攝 政 太 政 大 臣

百首の歌奉りし時

藤 原 業 清

月見ばといひしばかりの人は來で楨の戸たゞく庭の松風

藤 原 業 清

やまざとに月はみるやと人もこす空行く風ぞ木の葉をもとふ

藤 原 業 清

ありあけの月のゆくへをながめてぞ野寺の鐘は聞くべかりける

藤 原 業 清

同じ家の歌合に山月の心をよめる

藤 原 業 清

○まつち 待つー待乳山。

○月見はミ 月が出たらは來よう
と。

○月のゆくへ 月の入る西方。西
の方は極樂淨土があるのです。

○山の端を出でて 山の端を出
ない内も出て同じく心盡したの
意味。
○まつ 待つー松。
○くもるも 一たんは曇つたが。

○峯の月 一本「嶺の雲」

○うき雲 浮きー憂き。

○見し人ゆゑに 逢ひ見た人の戀
し故に。

○ならし なるらし。
○もる 漏るー守る。

山の端を出でてまつちの木の間より心づくしのありあけの月
和歌所の歌合に深山曉月といふことを

鴨 長 明

よもすがらひとりみ山のまきの葉にくもるも澄める有明の月

藤 原 秀 能

熊野に詣で侍りしとき奉りし歌の中に

おく山の木の葉のおつる秋風にたえく峯の月ぞのこれる

猷 圓 法師

月すめばよものうき雲そらに消えてみ山がくれをゆく嵐かな

花 山 院 御 歌

山家の心をよみ侍りける

伊 勢 大 輔

ながめ侘びぬ柴のあみ戸の明けがたに山のは近くのこる月かけ

和 泉 式 部

ありあけの月ばかりこそ通ひけれ來る人なしの宿の庭にも

大 納 言 經 信

すみなれし人かけもせぬわが宿に有明の月はいく夜ともなく

家にて月照水といへる心を人々よみ侍りけるに

住む人もあるかなきかの宿ならし葦間の月のもるにまかせて

○思ひきや 思つたかい。

○こゝろうかれし 在俗のまき心の浮れた。
○めぐり逢ひぬる 今は出家してゐてもやはり心の浮れる秋に廻り逢つた。
○袖に 涙の袖に。
○都をいでぬ我が身なりせば 都を出て修行しない我が身であつたならば。
○厭ふ 一本「出づる」
○我には曇れ 思ひ出の種になる月を我には見せるなの意味。

○月 真如の月。
○いそぢの闇 これまで五十年の煩惱。

○かなし 一本「近し」

○こゝろある人 俗念のある人。

○月やあらぬと 月は昔のまゝではないか。

○やま路の友と 月は山の端さして入るので、我が山へ入る道の友として。

○都おほゆる 都の思ひ出される

○君も問へ 君も訪ひ来れ。

○天の戸 春日神社は天兒屋根命で、天照大神が天岩戸に籠られた時、それを開けるのに苦心したといふ神話によつてである。

秋の暮に病にしづみて世をのがれ侍りける又の年の秋九月十餘日とをがあまり月くま
なく侍りけるによみ侍りける
思ひきやわかれし秋にめぐりあひて又もこの世の月を見むとは
西行法師

月をみてこゝろうかれしいにしへの秋にも更にめぐり逢ひぬる
夜もすがら月こそ袖に宿りけれむかしの秋を思ひ出づれば
月のいろに心をきよく染めましや都をいでぬ我が身なりせば
すつとならばうき世を厭ふしるしあらむ我には曇れ秋の夜の月
更けにける我が身の影を思ふまに遙かに月のかたぶきにけり
入道親王覺性

ながめて過ぎにしかたを思ふ間に峯よりみねに月はうつりぬ
藤原道經
秋の夜の月に心をなぐさめてうき世に年のつもりぬるかな
前大僧正慈圓
秋をへて月をながむる身となれりいそぢの闇をなになけくらむ
藤原隆信朝臣
百首の歌奉りしに

ながめてもむそぢの秋は過ぎにけり思へばかなし山の端の月
源光行

こゝろある人のみ秋の月を見ばなにをうき身のおもひ出にせむ
二條院讚岐

身の憂さに月やあらぬと眺むれば昔ながらの影ぞもり来る
寂超法師

ありあけの月よりほかに誰をかはやま路の友とちぎり置くべき
大江嘉言

山里にて月の夜都を思ふといへる心をよみ侍りける
惟明親王

都なる荒れたるやどにむなくや月にたづぬる人かへるらむ
式子内親王

思ひやれなにを忍ぶとなければども都おほゆるありあけの月
かへし
ありあけのおなじながめは君も問へみやこのほかも秋のやま里
春日社の歌合に曉月の心を
攝政太政大臣

右大將忠經

○をちかたの山 月が落ちに遠方を云ひ懸く。

○入りやらで 聞へも入らずに。月のやすらひ 月ゆるゑの休らひ

○かへさは 歸る時は。更けにけむ 一本「更けぬらむ」

○ふる郷 出家の後、在俗の頃住んだ所を云ふ。

○宿もる 守る一洩る。

雲をのみつらきものとてあかす夜の月や梢にをちかたの山

藤原保秀朝臣

入りやらで夜を惜しむ月のやすらひにほのふく明くる山の端ぞうき

月あかき夜定家朝臣に逢ひて侍りけるに歌の道には心ざし深き事はいつ

ばかりよりのことにかと尋ね侍りければわかく侍りしとき西行に久しく

あひともなひて聞き習ひ侍るよし申してそのかみ申しし事など語り侍り

て歸りて朝に遣はしける

法橋行遍

あやしくぞかへさは月の曇りにし昔がたりに夜や更けにけむ

寂超法師

ふる郷の宿もる月にこと問はむわれをば知るやむかし住みきと

遍昭寺にて月を見て

平忠盛朝臣

住み來けむむかしの人は影たえて宿もるものはありあけの月

あひ知りて侍りける人の許にまかりたりけるにその人外に住みていたう

荒れたる宿に月のさし入りて侍りければ

前中納言匡房

八重葎しけれるやどは人もなしまばらに月のかけぞすみける

題しらず

神祇伯顯仲

○ふぢ江のうら 播磨國。
○いさよふ 行かうとして行きやらぬ。

○出しほ 「月の出る」を「出潮」に云ひ懸く。

○おのづから 自然。
○よそに 餘所目に。

○いろなき人のそで 潮にぬれた袖に宿る月は色がないのでかう云ふ。つまり自分の月は紅涙に宿るので色があるの意味。

○ながめよと 人に眺めよと。

○しめ置きていまやと 葦地を占め置いていまやと。
○まつむし 「我が身を待つ」意味を云ひ懸く。

鷗かもめるるふぢ江のうらのおきつ洲に夜舟いさよふ月のさやけさ

俊惠法師

なにはがた汐干にあさる葦たづも月かたぶけば聲の恨むる

和歌所の歌合に海邊月といふことを

大僧正慈圓

和歌の浦に月の出しほのさすまゝによる鳴く鶴の聲ぞかなしき

定家朝臣

藻しほくむ袖の月影おのづからよそにあかさぬ須磨のうら人

藤原秀能

明石がたいろなき人のそでを見よすゞろに月もやどるものかは

熊野に詣で侍りしついでに切目宿にて海邊眺望といふ心ををのこどもつ

具親

ながめよと思はでしもやかへるらむ月まつ浪のあまの釣舟

八十に多くあまりて後百首の歌めししによみて奉りし

皇太后宮大夫俊成

しめ置きていまやおもふ秋山の蓬がもとにまつむしの鳴く

千五百番歌合に

あれわたる秋の庭こそあはれなれまして消えなむ露のゆふぐれ

○秋されば 秋になるを。

○かり 刈り一程。
○ねざめ 「根」を云ひ懸く。
○うらみ 裏見一恨み。

題しらず

雲かゝる遠山ばたの秋されば思ひやるだにかなしきものを

西行法師

五十首の歌人々によませ侍りけるに迷懷の心をよみ侍りける

守覺法親王

風そよぐ篠のをさゝのかりのよを思ふねざめに露ぞこほるゝ

寄風懷舊といふことを

左衛門督通光

淺茅生やそでに朽ちにし秋の霜わすれぬ夢を吹くあらしかな

皇太后宮大夫俊成女

葛の葉のうらみにかへる夢の世をわすれがたみの野べの秋かぜ

祝部允仲

題しらず

白露は置きにけらしな宮城野のもとあらこの秋末たわむまで

法成寺入道前太政大臣女郎花を折りて歌よむべきよし侍りければ

紫式部

女郎花さかりのいろを見るからに露のわきける身こそしらるれ

法成寺入道前攝政太政大臣

白露はわきてもおかじ女郎花こゝろからにやいろの染むらむ

曾根好忠

題しらず

やま里に葛はひかゝる松がきのひまなくものは秋ぞかなしき

○もこあらのご萩 本の粗い小萩
古今集卷十四「宮城野の本あら
小萩露を重み風を待つこ君をこ
を待て」
○見るからに 見るにつれて。
○露のわきける身 露の恵みが差
別をつけた不運な我が身。
○もおかじ 一本「おかまし」
○こゝろからにや 我が心の故に
の序。
○やま里に 松がきの「隙なく」

○もゝ年の 百年の。多数の年の。

○こゝろもなく 何とぞふこゝろ
もなく。

○あき 秋一賦き。
○あらし 嵐(世に)在らじ。

○うつろふ 帝位を去つて院御所
に移ることを云ひ懸く。
○きく 聞く一菊。
○野の宮 齋宮や齋院たるとき、
齋戒の爲に籠られる宮で、齋宮の
は山城國の嵯峨の有栖川にあり、
齋院のは同じく紫野にあった。
○しぐるゝ月 神無月(十月)。

秋の暮に身の老いぬることを歎きてよみはべりける

安法法師

もゝ年の秋のあらしはすこし來ぬいづれの暮のつゆと消えなむ

頼綱朝臣津の國の羽束といふ所に侍りける時つかはしける

前中納言匡房

秋果つるはつかの山のさびしきにあり明の月をたれと見るらむ

九月ばかりに薄を崇徳院に奉るとてよめる

大藏卿行宗

花すゝき秋の末葉になりぬればことごとくもなく露ぞこほるゝ

山里に住み侍りける頃嵐はげしきあした前中納言顯長が許に遣はしける

後徳大寺左大臣

夜半に吹くあらしにつけて思ふかな都もかくやあきはさびしき

かへし

前中納言顯長

世のなかにあきはてぬれば都にもいまはあらしの音のみぞする

清涼殿の庭に植ゑ給へりける菊を位去り給ひて後おぼしいでて

冷泉院御歌

うつろふは心のほかの秋なればいまはよそにぞきくの上の露

なが月の頃野の宮に前栽植ゑけるに

源順

たのもしな野の宮びとの植うる花しぐるゝ月にあへすなるとも

題しらず

讀人しらず

○朝ごまの歌 詩經小雅小旻に「戰々兢々如臨深淵如履薄冰」

○あふくま川 陸奥國の阿武隈川に逢ふを云ひ懸く。

○うもれ木 官爵が低くて不遇な自分の身に喩ふ。

○春をまちけり 暁進を待つこと

○ふるさと 降る古里。

○消えなましかば 消えたましたならば。

○ながめましかば 「やは」は反語

○なげき 「き」に「木」を云ひ懸く

○佛名 昔十二月十九日から三日間、罪障消滅の爲に行はれた三世諸佛の名號を唱へる法會。
○時過ぎて 三ヶ夜過ぎて。

山河のいはゆる水もこぼりしてひとりくだくる峯のまつかぜ

百首の歌奉りし時

朝ごとにみぎはの氷ふみわけて君につかふるみちぞかしこき

最勝四天王院の障子にあふくま川かきたる所

君が代にあふくま川のうもれ木もこぼりの下に春をまちけり

藤原家隆朝臣

元輔が昔すみはべりける家の傍に清少納言すみける頃雪いみじう降りて

へだての垣もたふれ侍りければ申しつかはしける

赤染衛門

あともなく雪ふるさととは荒れにけりいづれむかしの垣根なるらむ

御なやみも重くならせたまひて後雪のあしたに

後白河院御歌

露のいのち消えなましかばかくばかりふる白雪をながめましかば

雪によせて述懐の心をよめる

皇太后宮大夫俊成

柚山やこすゑにおもる雪折にたへぬなげきの身をくだくらむ

佛名のあしたけづり花を御覽じて

朱雀院御歌

時過ぎて霜にかれにし花なれど今日はむかしのこゝちこそすれ

花山院おりの給ひて又の年御佛名にけづり花につけて申し侍りける

前大納言公任

○ほごもなく覺めぬる夢 花山院の在位程なく讓位されたことを指す。

○いづれのよごご 急なつたので心惑ひして……

○おほかたに 世の習ひにて通り一へんに。

ほごもなく覺めぬる夢の中なれどその世に似たる花の色かな

かへし

御形宣旨

見し夢をいづれのよごごと思ふ間にをりをわすれぬ花のかなしさ

題しらす

皇太后宮大夫俊成

老いぬともまたも逢はむとゆく年に涙の玉をたむけつるかな

慈覺大師

おほかたに過ぐる月日をながめしは我が身に年のつもるなりけり

新古今和歌集 卷第十七

雜歌中

○朱鳥 持統天皇の年號。

○しら浪のの歌 萬葉集卷一ト。

朱鳥五年九月紀伊國行幸の時

しら浪のはままつが枝の手向草いく世までにか年の經ぬらむ

河島皇子

やましろのいは田の小野の杵原見つゝや君が山路こゆるむ

式部卿宇合

蘆の屋の灘の鹽やきいとまなみつけのを櫛もささず來にけり

在原業平朝臣

晴るゝ夜の星か河邊の螢かもわが住むかたの螢のたく火か

しがの螢の鹽やくけむり風をいたみ立ちはのほらで山にたなびく

讀人しらず

難波女の衣ほすとて刈りてたく葦火のけぶり立たぬ日ぞなき

貫之

ながらの橋をよめる

忠岑

○いさまなみ 暇がないので。

○晴るゝ夜の歌 伊勢物語に。

○しがの螢 筑前國の志賀の浦の海人。

○風をいたみ 風が烈しいので。

○むかしながら「昔ながら」に「長檣橋」を云ひ懸く。昔ながらミいふ橋の名だけは變らないで。

○はるの日の「長」を云ひ起す序。

年ふれば朽ちこそまされ橋柱むかしながらの名だにかはらで

はるの日のながらの濱に船とめていづれか橋と問へどこたへず

朽ちにけるながらの橋を來て見ればあしの枯葉に秋風ぞ吹く

題しらず

おきつかぜ夜半に吹くらし難波瀾あかつきかけて波ぞよすなる

春須磨の方へまかりてよめる

須磨の浦のなぎたるあさは目もはるに霞にまがふあまの釣舟

天曆の御時屏風の歌

秋かぜの關吹き越ゆるたびごとに聲うち添ふる須磨の浦浪

五十首の歌よみて奉りしに

須磨の關夢をとばさぬ浪のおとをおもひもよらで宿をかりけり

和歌所の歌合に關路秋風といふことを

人住まぬ不破のせき屋の板びさし荒れにしのはたゞ秋の風

明石の浦をよめる

惠慶法師

後徳大寺左大臣

權中納言定頼

藤原孝善

壬生忠見

前大僧正慈圓

攝政太政大臣

源俊頼朝臣

○目もはるに 目も遙に「芽も張る(春)」に。

○夢をとばさぬ 夢を見果てさせない。

○不破のせき屋 美濃國。

○ひこりあかし「ひこり明し」に「明石浦」を云ひ懸く。

あまをぶね苦ふきかへす浦風にひとりあかしの月をこそ見れ
眺望の心を

寂蓮法師

○みづの江 丹後國與謝郡か。

和歌のうらを松の葉ごしにながむれば木末によする蟹の釣ぶね
千五百番歌合に

正三位季能

○なたの鹽屋 攝津國。

みづの江のよしのの宮は神さびてよはひたけたる浦の松風
海邊の心を
いまさらに住みうしともいかゞせむなだの鹽屋のゆふ暮の空

藤原秀能

○おほよぎの浦 伊勢國。
○かへらずは はじめに齋宮で下つたが再び娘について歸らないならはの意味。

おほよどの浦に立つなみかへらずば松のかはらぬ色を見ましや
大貳三位里にいで侍りけるをきこしめして

後冷泉院御歌

○まつ人 待つ松。
○里にこのみは思はざらなむ 里にこはかりは思ひ給ふな。

まつ人は心ゆくともすみよしの里にとのみは思はざらなむ
御かへし

大貳三位

○まつともおもほえて 里に待つ人は待つとも思はれずして。

住吉の松はまつともおもほえて君が千とせのかけぞこひしき
教長卿名所の歌よませ侍りけるに

祝部成仲

○しるきかな 顯著なこゝろ。
○吹上の濱 紀伊國。

うちよする浪のこゑにてしるきかな吹上の濱の秋のはつ風
百首の歌奉りしとき海邊の歌

越前

○よさむになれや 夜寒になれはか。

おきつ風よさむになれや田子の浦の蟹の藻鹽火たきまさるらむ
海邊霞といへる心をよみ侍りし

家隆朝臣

○けふこては 今日ほ子の日こてつてか。

見わたせば霞のうちもかすみけりけぶりたなびくしほ籠の浦
大神宮に奉りける百首の歌の中に若菜をよめる

皇太后宮大夫俊成

○鈴鹿山 伊勢國。

けふとてや磯菜つむらむ伊勢島や一志の浦の蟹のをとめご
伊勢にまかりける時よめる

西行法師

○ふり 振り(鈴の縁語)。

鈴鹿山浮世をよそにふり捨てていかになりゆく我が身なるらむ
題しらず

前大僧正慈圓

○なりゆく 「鳴り」を云ひかく。

世のなかを心たかくもいとふかな富士のけぶりを身のおもひにて
あづまの方へ修業しはべりけるにふじの山をよめる

西行法師

○おもひ 「ひ」に「火」を云ひ懸く

風になびく消えて 下句の序

○ときしらぬ いついふ時もなく常に。この歌伊勢物語に。

ときしらぬ山は富士のねいつとてか鹿の子斑に雪のふるらむ
題しらず

業平朝臣

○ときばのやま 山城國葛野郡。

春秋もしらぬときはのやま里は住む人さへや面がはりせぬ
五十首の歌奉りし時

在原元方

○ときばのやま 山城國葛野郡。

春秋もしらぬときはのやま里は住む人さへや面がはりせぬ
五十首の歌奉りし時

前大僧正慈圓

○花ならで 花の爲ではなくて、世を厭ふ爲に。

○花散りなほと 花が散つなら出るたらうと。

○ひき筋になれなほ 一樣に聞き馴れたならば。

○すぎ 過ぎ杉。

○まつ 待つ一松。

○ここの外なる 意外なる。

花ならでたゞ柴の戸をさしておもふ心のおくもみ吉野の山

題しらず

西行法師

吉野山やがて出でじとおもふ身を花散りなばと人やまつらむ

藤原家衡朝臣

いとひてもなほいとほしき世なりけり吉野のおくの秋の夕ぐれ

千五百番歌合に

右衛門督通具

ひと筋になれなばさてもすぎの庵に夜なくかはる風の音かな

守覺法親王五十首の歌よませ侍りけるに閑居の心をよめる

有家朝臣

誰かはと思ひ絶えてもまつにのみ音づれてゆく風は恨めし

鳥羽にて歌合し侍りしに山家嵐といふことを

宜秋門院丹後

山ざとは世の憂きよりも住みわびぬことの外なるみねの嵐に

百首の歌奉りし時

家隆朝臣

瀧のおと松のあらしも馴れぬればうち寝るほどの夢は見せけり

題しらず

寂然法師

ことしけき世をのがれにしみ山邊にあらしの風も心して吹け

少將隆光横川にまかりて頭おろし侍りけるに法服つかはすとて

權大納言師氏

○昔の衣 僧の修行服。

○おく 置く一奥。

○おほ原の里 憂きこころは多いを云ひ懸く。

○をしほの山 小鹽山に惜しいを云ひ懸く。

○定めて 心をさためて。

○昔の庵 一本「草の庵」次の歌も同様。

○さして 戸閉して一心ざして。

○みちぞ露けき 一本「道の露けき」

○もり 漏り一守り。

○住まで 住まないで。

おくやまの昔の衣にくらべ見よいつれか露の置きまさるとも

かへし

如 覺

しら露のあしたゆふべにおく山のこけのころもは風もさはらず

能宣朝臣大原野に詣でて侍りけるに山里のいとあやしきに住むべくもあらぬさまなる人の侍りければいづこわたりより住むぞなど問ひ侍りけれ

讀人しらず

世の中をそむきにとては來しかども猶うきことはおほ原の里

かへし

能宣朝臣

身をばかつをしほの山と思ひつゝいかに定めて人の入りけむ

かへし

能宣朝臣

深き山に住み侍りけるひじりの許に尋ねまかりけるに庵の戸を閉じて人

も侍らざりければ歸るとてかきつけける

惠慶法師

昔の庵さして來つれど君まさでかへるみ山のみちぞ露けき

ひじり後に見てかへし

西行法師

荒れはてて風もさはらぬ昔の庵に我はなくとも露はもりけむ

題しらず

西行法師

山ふかくさこそ心はかよふとも住まであはれは知らむものは

○すまぬ 人の住まぬ。
○月も 月でさへも。

○爪木 蕪。

○おごろがした 荆棘の下。世の
亂れた中にも」の意味を云ひ懸く
この歌増鏡に。

○いまはさて 今は隠者にならう
とて。
○千世をは君と 千世をは君に識
れとて。
○思ふか物を ものを思ふか。

やまかけにすまぬ心はいかなれや惜しまれて入る月もあるよに

山家送年といへる心をよみ侍りける

寂蓮法師

立ち出でて爪木をり來し片岡のふかき山路となりけるかな

住吉の歌合に山を

太上天皇

おく山のおどろがしたもふみわけて道ある世ぞと人に知らせむ

百首の歌奉りし時

二條院讚岐

ながらへてなほ君が代を松山のまつとせし間に年ぞ經にける

山家松といふことを

皇太后宮大夫俊成

いまはとてつま木こるべき宿の松千世をば君となほ祈るかな

春日社の歌合に松風といへることを

有家朝臣

われながら思ふか物をとばかりに袖にしぐるゝ庭の松かせ

山寺に侍りける頃

道命法師

世をそむくところとか聞くおく山はもの思ひにぞ入るべかりける

少將井の尼大原より出でたりと聞きてつかはしける

和泉式部

世をそむく方はいづくもありぬべし大原山は住みよかりきや

かへし

少將井尼

おもふことおほ原山のすみ竈はいとゞなけきの數をこそ積み

題しらず

西行法師

たれ住みてあはれ知るらむ山里の雨ふりすさぶたぐれの空

しをりせでなほ山深くわけ入らむうきこと聞かぬところありやと

殷富門院大輔

かざしをる三輪のしげ山かきわけてあはれとぞ思ふ杉立てるかど

法輪寺に住み侍りけるに人の詣できて暮れぬとていそぎ侍りければ

道命法師

いつとなきをぐらの山の陰をみて暮れぬと人の急ぐなるかな

後白河院栖霞寺におはしましけるに駒引のひきわけの使にて参りけるに

定家朝臣

嵯峨のやま千世のふるみち跡とめてまた露わくるもち月の駒

歎くこと侍りける頃

智恩院入道前關白太政大臣

さほ川のがれひさしき身なれども浮世に逢ひて沈みぬるかな

冬の頃大將はなれて歎くこと侍りける明くる年右大臣になりて奏し侍り

東三條入道關白太政大臣

○をぐらの山 「小暗き」を云ひ懸く。
○駒引のひきわけの使 駒牽の日に天皇が南殿で馬を見られてから王御以下次第に賜はつて、残つたのを引分使とて次將を以て院、東院など然るべき所々へ進らすといふ。
○嵯峨のやま 上皇の嵯峨に居られたのは嵯峨、宇多、三天皇なので、天長延喜の先例を以て引分の使を進らすこの趣。
○もち月の駒 信濃國望月牧から出た駒。
○さほ川のがれ 藤原氏の一流を云ふ。

○しをりせで 再び出る爲の道しるべをせず。

○かざしをる 三輪の枕詞。

○しげ山 木の繁き山。

○我が庵は三輪の山も戀しくはらむらひ來ませ杉立てる門」

○かかるせ 斯やうな瀬(右大臣
になる折)
○たえぬばかりも 川の絶える程
も一身の絶える程も。

○もののふの 八十氏河の枕詞。
この歌萬葉集卷三に。
○八とうぢ川 山城國の宇治川。
○布引の瀧 攝津國。

○ひさかたの 「天」の枕詞。
○むかし聞くあまの河原をたづね
来て 伊勢物語に惟喬親王が交野
に狩して天の川の所に至つて、酒
宴されたさいふこが見える。
○天の川かよふうき木 張鷟が漢
の武帝の使で、棧に乗つて天漢の
源を究め孟津に至つて織女に逢つ
て歸つたさいふ。
○紅葉の橋 古今集卷四に「天の
川紅葉を橋に渡せばやたなほたつ
めの秋をしも待つ」

かかるせもありけるものを宇治川のたえぬばかりも歎きけるかな
御かへし
昔よりたえぬ川のするなれば淀むばかりをなに歎くらむ

圓融院御歌
人 磨

もの、ふの八とうぢ川の網代木にいさよふ波のゆくへ知らずも
布引の瀧見にまかりて
我が世をばけふかあすかと待つかひの涙の瀧といづれ高けむ

中納言行平

京極前太政大臣布引の瀧見にまかりたりけるに
水上のそらに見ゆるはしら雲のたつにまがへる布引のたき

二條關白内大臣

最勝四天王院の障子に布引の瀧かきたる所
ひさかたの天のをとめがなつごころも雲るにさらす布引のたき
天の河原を過ぐとて

藤原有家朝臣

むかし聞くあまの河原をたづね来てあとなき水をながむばかりぞ
題しらず

攝政太政大臣

天の川かよふうき木にこと問はむ紅葉の橋は散るや散らずや
堀河院の御時百首の歌奉りけるに

藤原實方朝臣

前中納言匡房

○へぬらむ 一本「かへぬら」

○さだめなき名の歌 古今集卷十
八に「世の中は何か常なる飛鳥川
昨日の瀬ぞ今日は瀬になる」

○心ながさ 一本「心づよさ」

○友もがな 友もあれはいいな。

○人こそせじと 人に訪ひ來らし
めまこと。

○わくらほに たまには。
○音無川 音づれない意味を云ひ
懸く。

真木の板も苔むすばかりなりにけり幾世へぬらむ瀬田の長橋

天曆の御時屏風に國々の所の名を書かせさせ侍りけるに飛鳥川 中 務

さだめなき名には立てれど飛鳥川早くわたりし瀬にこそありけれ

題しらず 前大僧正慈圓

山ざとにひとりながめて思ふかな世にすむ人の心ながさを

西行法師

やま里にうき世いとほむ友もがなくやしく過ぎしむかし語らむ

前大僧正慈圓

山里は人來させじと思はねど問はるゝことを疎くなりゆく

草の庵をいとひてもまたいかせむ露のいのちのかかるかぎりは

都を出でて久しく修業し侍りけるにとふべき人のとはず侍りければ熊野

より遣はしける 大僧正行尊

わくらばになどかは人のとはざらむ音無川にすむ身なりとも

あひ知れりける人の熊野に籠り侍りけるにつかはしける 安法法師

世をそむく山のみなみの松風に苔のころもや夜さむなるらむ

西行法師百首の歌すゝめてよませ侍りけるに 藤原家隆朝臣

○まつ 待つ一松。

○しきみつむ 櫓を描む。

○忘れじの人だに 忘れまい必ず
訪はうと云つた人さへ。
○ゆきに 雪の降る時節に。

○けぶりたえて 俊恵の死んだこ
こを云ふ。
○なゆき「き」に「木」を云ひ懸く
○山寺 一本「山里」

○西のむかへ 西方淨土からの彌
陀の來迎。

いつかわれこけの袂につゆ置きてしらぬ山路の月を見るべき
百首の歌奉りしに山家の心を
いまはわれまつのはしらの杉の庵に閉づべきものを苦ふかき袖

式子内親王

しきみつむ山路の露に濡れにけりあかつきおきの墨染のそで

小侍 從

忘れじの人だにとはぬ山路かな櫻はゆきに降りかはれども

攝政太政大臣

五十首の歌奉りしに

影やどす露のみしけくなり果てて草にやつるゝふるさとの月

藤原雅經

俊恵法師身まかりて後年頃つかはしけるたき木など弟子どもの許につか
はすとて

加茂重保

けぶりたえてやく人もなき炭竈の跡のなけきをたれかこるらむ

老いて後津の國なる山寺にまかり籠れりけるに寂蓮尋ねまかりて侍りけ
るに庵の様すみあらしめてあはれに見え侍りけるを歸りて後とぶらひ侍り

西日法師

ければ
八十あまり西のむかへを待ちかねて住みあらしたる柴の庵ぞ

○こまきさ 云ひなき。

○斧の柄の朽ちし昔 支那の王質
が仙人の茶うつつを見て斧の
柄の朽ちたのに驚いて宿に歸つた
ら、世がすっかり變つてゐたとい
ふ傳説。
○ありしにもあらぬ世 後白河院
の御在世中とはすつかりかはつた
世。

○世をも 一本「世にも」
○おくの竹 竹の奥に。

○ふるはた 「古畑」か。
○山がつの 一本「山か伊の」
○かた岡かけて 片岡にかけて。
○しのびかへさむ 「田を返す」意
味を云ひ懸く。
○小松に年ふりて 小松に年が積
つて。

山家の歌あまたよみ侍りけるに

前大僧正慈圓

山里にとひくる人のことぐさはこの住居こそうらやましけれ

式子内親王

後白河院かくれさせ給ひて後百首の歌に

斧の柄の朽ちし昔は遠けれとありしにもあらぬ世をもふるかな

皇太后宮大夫俊成

述懐百首の歌よみ侍りけるに

いかにせむ賤が園生のおくの竹かき籠るともよの中ぞかし

祝部 成仲

老の後昔を思ひ出で侍りて

秋來ればむかしをのみぞしのぶ草葉するのつゆに袖ぬらしつゝ、

前大僧正慈圓

題しらす

をかのべの里のあるじを尋ねれば人はこたへず山おろしの風

西行法師

ふるはたの岨の立木にゐる鳩の友よぶこゑのすごき夕ぐれ

山がつかた岡かけてしむる野のさかひに立てるたまのを柳

しけき野をいく一村にわけなして更にむかしをしのびかへさむ

むかしみし庭の小松に年ふりてあらしの音をこするにぞ聞く

大僧正行尊

三井寺やけて後すみ侍りける坊を思ひやりてよめる

○あさぢがすゑ 一本「淺茅が原」

住みなれしわが故郷はこのころや淺茅が原にうづら鳴くらむ

攝政太政大臣

百首の歌よみ侍りける

ふるさとはあさぢが末になり果てて月にのこれる人のおもかけ

西行法師

これや見しむかし住みけむ跡ならむよもぎが露に月のかゝれる

貫之

人の許にまかりてこれかれ松の陰におびりて遊びけるに

陰にとてたちかくるれば唐ころも濡れぬ雨ふる松のこゑかな

西院の邊に早うあひ知りける人を尋ね侍りけるに壘つみ侍りける女し

らぬよし申しければよみ侍りける

能因法師

石の上「ふり」の枕詞。

ぬしなき宿を

惠慶法師

いにしへを思ひやりてぞ戀ひわたる荒れたるやどの苔の岩橋

守覺法親王五十首の歌よませ侍りけるに閑居の心

藤原定家朝臣

わくらばに問はれし人もむかしにてそれより庭のあとは絶えにき

物へまゐりける道に山人あまた逢へりけるを見て

赤染衛門

なげきこる身は山ながら過せかしうき世の中になに歸るらむ

○濡れぬ雨 松風の聲を雨の音に見立ててゐる。

○見しむかし 見た昔に。

○石の上「ふり」の枕詞。

○わくらばに たまさかに。

○問はれし人も 人に訪はれたこと。

○それより それ以來。

○あま 人の跡。

○なげきこる 「木を伐(コ)る」意

味を云ひ懸く。山ながら 山にゐながら。

○なに 何しに。

○秋されば 立田山「立ちても」の序。

○朝倉 筑前國朝倉郡も土佐國土佐郡朝倉村も云ふ。この歌は神樂歌の朝倉の歌詞。十訓抄にこの話が見える。
○木の丸殿 丸木の黒木で作った御殿。

題しらず

秋されば狩人こゆる立田山たちても居てもものをしぞ思ふ

人 麿

朝倉や木の丸殿に我が居れば名のりをしつゝゆくは誰が子ぞ

天智天皇御歌

新古今和歌集 卷第十八

雑歌下

菅贈太政大臣

○あしびき 山の枕詞から山のこ
こ。以下十二首は菅原道真が筑紫
に遷された時に詠んだ歌云々。
○ひさの 一本「ひさぞ」
○あかねさし 日の枕詞から日の
出ること云々。

山

あしびきのかなたこなたに道はあれど都へいざと言ふ人のなき

日

天の原あかねさし出づる光にはいづれの沼かさしのこるべき

月

月毎にながると思ひします鏡にし浦にもとまらざりけり

雲

やまわかれ飛びゆく雲のかへり來るかけ見るときはなほ頼まれぬ

霧

霧立ちて照る日の本は見えずとも身は惑はれじよるべありやと

雪

花とちり玉と見えつゝあざむけば雪ふるさとぞ夢にみえける

○惑はれじ 惑はされまい。
○よるべ 何れ無實が明らかにな
つて歸られるよるべ。

松

おいぬとて松はみどりぞまさりける我が黒かみの雪のさむさに

野

つくしにも紫おふる野邊はあれどなき名かなしぶ人ぞきこえぬ

道

刈萱の關もりにのみ見えつるは人もゆるさぬ道べなりけり

海

うみならずたゝへる水の底までも清きこゝろは月ぞてらさむ

鶺鴒

ひこ星の行きあひを待つかさぎの渡せる橋をわれにかさなむ

浪

ながれ木と立つし波とやく鹽といづれか辛きわたつみの底

題しらず

さゝなみや比良山風のうみ吹けば釣するあまの袖かへる見ゆ

白波のよする渚に世をつくす海士の子なればやども定めず

千五百番歌合に

新古今和歌集卷第十八 雑歌下

二三七

攝政太政大臣

○紫おふる野邊 ゆかりある者を
云々。

○刈萱の關 筑前國。

○行きあひ 織女星との行き逢ひ
○かさなむ 貸して貰ひたい。

○ながれ木 我が流人の身の上を
思ひよせてゐる。

○世をつくす 一生を費す。

○いとまなの 暇のない。

舟のうち波の下にぞ老いにける蟹のしわざもいとまなの世や

前中納言匡房

題しらず

さすらふる身は定めたるかたもなし浮きたる舟の浪にまかせて

増賀上人

いかにせむ身をうき舟の荷を重みつひの泊やいづくなるらむ

人麿

○うき舟 憂き一浮き。

○水の江 丹後國與謝郡。

○すみ 澄み一住み。

蘆鴨の騒ぐ入江の水の江の世にすみがたき我が身なりけり

大中臣能宣朝臣

あしがもの羽風になびく浮草のさだめなき世をたれかたのまむ

源順

なぎさの松といふことをよみ侍りける

老いにけるなぎさの松の深みどりしづめる影をよそにやは見る

能因法師

山水をむすびてよみ侍りける

あしびきの山水水にかけ見れば眉しろたへにわれ老いにけり

法成寺入道前攝政太政大臣

尾になりぬと聞きける人に装束つかはすとて

なれ見てし花の袂をうちかへし法のころもをたちぞかへつる

后に立ち給ひけるととき冷泉院の后宮の御ひたひを奉り給ひけるを出家の

○たちぞかへつる 裁ち替へた。

○しづめる影 老松の底深く映つた影に、我が老の身の沈淪してゐる様を思ひよそへてゐる。
○よそにやは見る よそ事に見よらかい。

とき返し奉り給ふとて

東三條院

そのかみの玉のかざしをうちかへし今は衣のうらをたのまむ

かへし

冷泉院太皇太后宮

つきもせぬ光の間にまぎれなで老いて歸れるかみのつれなさ

上東門院出家の後こがねの装束したるぢんの數珠銀の筥に入れて梅の枝

枇杷皇太后宮

につけて奉られける

かはるらむ衣のいろをおもひやる涙やうらの玉にまがはむ

かへし

上東門院

まがふらむ衣の玉にみだれつゝなほまだ覺めぬこゝちこそすれ

題しらず

和泉式部

潮のまによもの浦々たづぬれどいまはわが身のいふかひもなし

屏風の繪に鹽竈の浦をかきて侍りけるを

一條院皇后宮

いにしへの蟹やけぶりとなりぬらむ人目もみえぬしほ竈の浦

少將高光横川に上りて頭おろし侍りにけるを聞かせ給ひてつかはしける

天曆御歌

都より雲の八重たつおくやまの横川の水はすみよかるらむ

○玉のかざし 装束の時に髪に飾るもの。ひたひとも云ふ。
○衣のうら 法華經に「衣裏寶珠」見え、佛道のこと。
○つきもせぬ光の間に 威光の盡きもしない間でも。
○こがねの装束したるぢんの數珠 黄金で飾つた沉香の數珠。

○玉に 一本「たまご」

○潮のまに 潮の干潟になつた間に。
○かひ 貝一效。

○すみ 澄み一住み。

御かへし

如 覺

○夢かぞ思ふおもひきや 古今集卷十八に「忘れては夢かぞ思ふ思ひきや雪踏みわけて君を見むかへし」

も、しきのうちのみ常にこひしくて雲の八重たつ山はすみうし

世をそむきて小野といふ所に住み侍りける頃業平朝臣雪のいと高う降り

つみたるをかきわけてまうで来て夢かぞ思ふおもひきやとよみ侍りけ

るに

惟 喬 親 王

ゆめかともなにか思はむ浮世をばそむかざりけむ程ぞくやしき

都の外に住み侍りける頃久しう音づれざりける人に遣はしける

女 御 徹 子 女 王

雲るとぶ鷹の音近きすまひにもなほ玉章はかけずやありけむ

亭子院おりの給はむとしける秋よみける

伊 勢

しらつゆは置きてかはれど百敷のうつろふ秋はものぞかなしき

殿上はなれ侍りてよみ侍りける

藤 原 清 正

天津風ふけひの浦にゐるたづのなかか雲居にかへらざるべき

二條院菩提樹院におはしまして後の春昔を思ひ出でて大納言經信参りて

讀 人 し ら ず

いにしへのなれし雲るをしのぶとや霞をわけて君たづねけむ

侍りける又の日女房の申しつかはしける

藤 原 定 家 朝 臣

最勝四天王院の障子に大淀かきたる所

○亭子院 宇多天皇。

○百敷のうつろふ秋 天子の代ら

れる秋。

○ふけひの浦 和泉國。

○雲居 皇居の殿上のこと。

御かへし

如 覺

○夢かぞ思ふおもひきや 古今集卷十八に「忘れては夢かぞ思ふ思ひきや雪踏みわけて君を見むかへし」

も、しきのうちのみ常にこひしくて雲の八重たつ山はすみうし

世をそむきて小野といふ所に住み侍りける頃業平朝臣雪のいと高う降り

つみたるをかきわけてまうで来て夢かぞ思ふおもひきやとよみ侍りけ

るに

惟 喬 親 王

ゆめかともなにか思はむ浮世をばそむかざりけむ程ぞくやしき

都の外に住み侍りける頃久しう音づれざりける人に遣はしける

女 御 徹 子 女 王

雲るとぶ鷹の音近きすまひにもなほ玉章はかけずやありけむ

亭子院おりの給はむとしける秋よみける

伊 勢

しらつゆは置きてかはれど百敷のうつろふ秋はものぞかなしき

殿上はなれ侍りてよみ侍りける

藤 原 清 正

天津風ふけひの浦にゐるたづのなかか雲居にかへらざるべき

二條院菩提樹院におはしまして後の春昔を思ひ出でて大納言經信参りて

讀 人 し ら ず

いにしへのなれし雲るをしのぶとや霞をわけて君たづねけむ

侍りける又の日女房の申しつかはしける

藤 原 定 家 朝 臣

最勝四天王院の障子に大淀かきたる所

○大淀のうら 伊勢國。

○ふみおく 踏み置く一文置く。かひ 貝一效。

○瀧つ瀬にの歌 榮華物語待星の巻では出羽辨の作。拾遺集卷八に「音羽川堰き入れて落す瀧つ瀬に人の心の見えもするかな」

○忠岑 忠見の父。

○誰さしも頼まば云々 誰さも來るのを頼みにしてゐるならば待つのも憂くあらうが。

大淀のうらに刈りほすみるめだに霞にたえてかへる鷹がね

最慶法師千載集書きて奉りける包紙に墨をすり筆を染めつゝ年ふれどか

後 白 河 院 御 歌

き顯はせることのはぞなきと書きつけて侍りける御かへし

濱千鳥ふみおくあとのつもりなばかひある浦に逢はざらめやは

上東門院高陽院におはしましてしけるに行幸侍りてせきいれたる瀧を御らん

じて

瀧つ瀬に人の心をみることはむかしに今もかはらざりけり

權中納言通俊後拾遺えらび侍りける頃まづ片はしもゆかしくなど申して

侍りければ申し合はせてこそとてまだ清書もせぬ本をつかはし侍りける

を見てかへしつかはすとて

あさからぬ心ぞみゆる音羽川せき入れし水のながれならねど

歌奉れと仰せられければ忠岑がなど書き集めて奉りける奥にかきつけ

る

言の葉のなかをなくくたづねれば昔の人に逢ひ見つるかな

遊女の心をよみ侍りける

ひとり寝のこよひもあけぬ誰としも頼まばこそは待つも憂からめ

藤原爲忠朝臣

壬 生 忠 見

周 防 内 侍

藤 原 爲 忠 朝 臣

壬 生 忠 見

周 防 内 侍

藤 原 爲 忠 朝 臣

壬 生 忠 見

周 防 内 侍

藤 原 爲 忠 朝 臣

○なみだの露 嬉し涙の露。

大江舉周はじめて殿上許されて草深き庭におりて拜しけるを見侍りて

赤染衛門

草わけて立ちるる袖の嬉しさに堪へずなみだの露ぞこぼるゝ

伊勢大輔

○忘れやはする 忘れようかい。

うれしさは忘れやはするしのぶ草しのぶるものを秋のゆふぐれ

大納言經信

秋風の音せざりせばしらつゆの軒のしのぶにかゝらましやは

右大將濟時

○しのぶ草 「忍ぶる」の序。

の目

ある所に通ひ侍りけるを朝光大將見かはして夜一夜物語してかへりて又

左大將朝光

しのぶ草いかなる露かおきつらむ今朝は根もみなあらはれにけり

讀人しらず

浅茅生をたづねざりせば忍草おもひ置きけむつゆを見ましや

小馬命婦

かへし

わづらひける人のかく申し侍りける

かへし

○われこそ先立ため 私こそ君よりは先立つたらう。

つゆの身の消えばわれこそ先立ためおくれむものか森の下草

和泉式部

○いのちたに 一本「命さへ」命さへあるならは見て貰へる。我が命も死後には思つてくれる人のないのは悲しい。

いのちだにあらば見つべき身のはてを偲ばむ人のなきぞ悲しき

大僧正行尊

例ならぬこと侍りけるに知れりける聖のとぶらひにまうで来て侍りければ

前大僧正慈圓

さだめなき昔がたりを數ふればわが身も數に入りぬべきかな

世の中のはれゆく空にふる霜のうき身ばかりぞ置きどころなき

例ならぬこと侍りけるに無動寺にてよみはべりける

頼みこし我が古寺の苔の下にいつしか朽ちむ名こそをしけれ

題しらず

大僧正行尊

くり返し我が身のとがを求むれば君もなき世にめぐるなりけり

清原元輔

憂しといひて世を一向に背かねばもの思ひ知らぬ身とやなりなむ

讀人しらず

○世を一向に背かねば 遁世しないので。
○もの思ひ知らぬ身 世の憂きことを思ひ知らぬ身。
○あめ 天。雨。
○ふる涙 降る憂き涙。

そむけどもあめの下をし離れねばいつくにもふる涙なりけり

○延喜 醍醐天皇の年號。
○紅の衣 女藏人は下臈なので、紅の衣を着ることが出来ないで、檢非違使が質さうとしたのだ。
○ひの色 日の色―緋の色。

延喜の御時女藏人内匠白馬節會見侍りけるに車より紅の衣を出しけるを
檢非違使のたゞさむとしければいひつかはしける
女藏人内匠
大空に照るひの色をいさめても天のしたにはたれか住むべき

かくいへりければたゞさすになりにけり

例ならで太秦に籠り侍りけるに心ほそく覺えければ 周防内侍

かくしつゝゆふべの雲となりもせばあはれかけても誰かしのばむ

題しらず 前大僧正慈圓

思はねど世をそむかむといふ人のおなじ數にやわれもなりなむ 西行法師

數ならぬ身をも心のもりがほにうかれてはまた歸り來にけり

おろかなる心のひくにまかせてもさてさはいかにつひの思ひを

とし月をいかで我が身におくりけむ昨日の人も今日はなきよに

うけがたき人の姿にうかび出でてこりずや誰もまた沈むべき

守覺法親王五十首の歌よませ侍りけるに 寂蓮法師

背きてもなほ憂きものは世なりけり身を離れたるこゝろならねば

迷懷の心をよめる

○かけて 心にかけて。

○思はねど 心には遣世したいと思はないのに。

○おなじ數に それと同列の人中に自分も數へられるたらう。

○もりがほに 守り顔に。

○さてさはいかにつひの思ひを さうしてゐては結局の道心は一體さうしよう。

○うけがたき人 人間の生を享け難いこと。

○また沈むべき 又惡業をして再び惡道に沈むべき。

○身のうさを思ひしらすはいかゞせむ 「なれども」を補ふ。

○うち絶えて 一本「打壞へて」
○あらぬ筋にも 自然に犯しあることによつて惡道の罪報を得るか。

○なれ行く月やいろを知るらむ 馴れて行く月は露と涙との色を知つてか、それに映る色が透つてゐるの意味。

○玉の緒の 命の。

○君 天皇。
○身を 我が身の長く御恵み受けること。
○和歌の浦 歌道のこと。
○よるべ 世に浮び出る便り。
○すゝむる 山へ籠れど勤める。

身のうさを思ひしらすはいかゞせむ厭ひながらもなほ過すかな
前大僧正慈圓

なにごとを思ふ人ぞと人間はば答へぬさきに袖ぞぬるべき

いたづらに過ぎにしことや歎かれむうけがたき身の夕ぐれの空

うち絶えて世にふる身にはあらねどもあらぬ筋にも罪ぞかなしき

和歌所にて迷懷の心を

山里にちぎりし庵やあれぬらむ待たれむとだに思はざりしを

右衛門督通具

そでにおく露をばつゆと忍べどもなれ行く月やいろを知るらむ

定家朝臣

君が代に逢はずばなにを玉の緒の長くとまでは惜しまれじ身を

家隆朝臣

おほかたの秋の寐覺のながき夜も君をぞいのる身を思ふとて

和歌の浦や沖つ潮合に浮び出づるあはれ我が身のよるべ知らせよ

その山のちぎりぬ月も秋かぜもすゝむるそでに露こほれつゝ

雅 經

○身をば頼まず 自身の出世など
は望みもされないので頼まず。

○こゝろからなれぬる 月が心か
ら涙の袖に馴染れた。

○浮き沈み 來世での浮き沈みは
來む世 來世。

○おしかへし 繰り返し。

○憂きにかへたるいのち 憂い代
りに長い命。

○猶ぞ 一本「猶も」

○さりともさ それにしても憂か
らぬ時もあるうかこ。

○故郷の夢 過去の榮華の夢。
かねつ、一本「かねつも」

君が代に逢へるばかりの道はあれど身をば頼まずゆくすゑの空

皇太后宮大夫俊成女

をしむとも涙に月もこゝろからなれぬる袖に秋をうらみて

攝政太政大臣

浮き沈み來む世はさてもいかにぞと心に問ひてこたへかねぬる

題しらず

我ながら心のはてを知らぬかな捨てられぬ世のまた厭はしき

五十首の歌よみ侍りけるに述懐の心を

守覺法親王

おしかへしものを思ふは苦しきに知らず顔にて世をや過ぎまし

世を捨つる心は猶ぞなかりける憂きをうしとは思ひしれども

述懐の心をよみ侍りける

左近中將公衡

すてやらぬ我が身ぞつらきさりとともと思ふこゝろに道をまかせて

題しらず

讀人しらず

憂きながらあればある世に故郷の夢をうつゝにさましかねつ、

源 師 光

賀 茂 季 保

荒 木 田 長 延

刑 部 卿 頼 輔

大 僧 都 覺 辨

老いらくの月日はいとゞはやせ川かへらぬ浪にぬるゝそでかな

よみて侍りける

藤 原 行 能

かきながす言の葉をだに沈むなよ身こそかくてもやま川の水

よめる

鴨 長 明

見ればまづいとゞ涙ぞもろ葛かづらいかにちぎりてかけはなれけむ

○やすき世 心安く暮せる世。

○綱手繩 舟を引く手綱の繩。

○老いらく 老いること。
○はやせ川 「月日が速い」に早瀬
川を云ひ懸く。

○やま川の水 「身は斯く沈んだ
まゝでも止まうが」の意味を云ひ
懸く。

○涙ぞ 一本「涙も」
○もろ葛 「諸葛」に「脆い」を云ひ
懸く。
○はなれけむ 一本「はなるらむ」

題しらず

源季景

○あれな 思出があれよ。
○なけれはさて 思出がないから
して。

○すまであらむ 住まないで居ら
う。

○柴の庵の 柴の庵のやうに。
○山に 西方の山に。

○月ぞさやけき 月が明ひ顔にさ
やけく照つてゐる。
○あり明の 「世に有つたらう」の
意味を云ひ懸く。
○つきせぬ 「月」に「盡させぬ」を
云ひ懸く。

○うけよ 我が思ひを納受せよ。

○しのぶ 一本「おもふ」
○たぐへて 副へて。

おなじくはあれなにしへ思出のなればとても忍ばずもなし

西行法師

何處にも生まれずば唯すまであらむ柴の庵のしばしなる世に

月のゆく山に心をおくり入れてやみなるあとの身をいかにせむ

五十首の歌の中に 前大僧正慈圓

思ふことなど問ふ人もなかるらむ仰けば空に月ぞさやけき

いかにして今まで世にはあり明のつきせぬものをいとふ心は

西行法師山里より罷り出でて昔出家し侍りしその月日にあたりて侍るな

ど申したりける返事に 八條院高倉

うき世出でし月日の影のめぐり來てかはらぬ道をまた照らすらむ

おほぞらに契るおもひの年もへぬ月日もうけよゆくする空の空 太上天皇

大神宮の歌合に 承仁親王

前大僧都全眞西國の方に侍りけるに遣はしける

ひと知れずそなたをしのぶ心をばかたぶく月にたぐへてぞやる

前大僧正慈圓ふみにては思ふ程の事も申し盡しがたきよし申し遣はして

侍りける返事に

前右大將頼朝

みちのくのいはでしのぶはえぞ知らぬかき盡してよつほの碑

世の中常なき頃 大江嘉言

今日までは人を歎きて暮れにけりいつ身のうへにならむとすらむ

題しらず 清慎公

道芝の露にあらそふ我が身かな何れかまづは消えむとすらむ

何とかや壁に生ふなる草の名よそれにもたぐふ我が身なりけり 皇嘉門院

こしかたをさながら夢になしつれば覺むる現のなきぞかなしき

松の木の焼けたるを見て 權中納言資實

千年ふる松だにくゆる世の中に今日とも知らで送るわれかな

題しらず 性空上人

數ならで世にすみの江の澄標いつをまつともなき身なりけり

うきながら久しくぞ世を過ぎにけるあはれやかけしすみよしの松 源俊賴朝臣

皇太后宮大夫俊成

○くゆる 燃ゆる。

○世にすみの江 世に住むを云ひ
懸く。

○澄標 水脈を示す里杵に「身
を盡し」を云ひ懸く。

○いつをまつともなき 立つ立身
するを待つでもない。

○あはれやかけし 住吉の神があ
はれをかけて下さつたのか。

○こしかた 過去のこと。

○壁に生ふなる草 いつまで草。
(いつまで生きようかの意味。)

○あらそふ 壽命を争ふ。

○身のうへに 我が身が人に歎か
れるやうに。

○つほの碑 昔田村磨が坪といふ
所に建てたといふ碑。

○かき盡してよ 碑のやうに十分
に書いて寄こし給へ。

○えぞ知らぬ 知り得ないから。

○しのぶ 忍ぶ一信夫。

○いはで 云はで一山岩手。

○みちのく いはで、しのぶ、え
ぞ、つほ皆奥州の地名。

○たぐへて 副へて。

○春日山 藤原氏の祖神を祭つてゐる。

○葦手長歌 長歌で繪のやうに書いたもの。

○ふるの社 「身の古る」に「布留の社」大和國を云ひ懸く。

○臨時の祭 十一月下の酉の日に行はれる賀茂神社の祭典。

○四位して 四位に叙して。

○やまる 山井山藍（小忌衣は白布に山藍で摺つたもの）。

○日陰のくみ緒 小忌衣著る人が冠に下げたもの。

○きて 来て一著る。

春日の社の歌合に松風といふことを

春日山たにの埋木朽ちぬともきみに告げこせ峯のまつかせ

藤原家隆朝臣
宜秋門院丹後

なにとなく聞けばなみだぞこほれぬる昔の袂にかよふまつかせ

女御徽子女王

さうしに葦手長歌などかきておくに

みな人のそむき果てぬる世の中にふるの社の身をいかにせむ
臨時の祭の舞人にて諸共にはべりけるをとも四位して後祭の日遣はし

實方朝臣

衣手のやまゐの水にかけ見えしなほそのかみの春ぞ戀しき

藤原通信朝臣

かへし
いにしへの山の衣なかりせば忘らるゝ路となりやしなまし

後冷泉院の御時大嘗會に日陰のくみ緒して實基朝臣の許につかはすとて
先帝の御時思ひ出でてそへていひつかはしける

加賀左衛門

たちながらきてだに見せよ小忌衣あかね昔のわすれがたみに

秋夜聞菫といふ題をよめと人々に仰せられておほとのごもりける朝にそ
の歌を御覽じて

天曆御歌

○人づてならで 人の歌によつてでなく直接に。

○ひぐらしに 終日。

○こゑ 一本「おさ」
○いとしも いとしも。「し」は助詞

○みちて 一本「ちらで」

○おどろげど 覺めるけれど。

○ながき夢路 迷ひの道。

○夕ぐれの 一本「夕ぐれに」夕ぐれよ
○見るからに 見るにつれて。
○ながめじと思ふころ あまり物悲しいで。
○暮れぬめり 暮れたやうだ。
○つくくみして 「鐘を撞く」を云ひ懸く。

あきの夜の曉がたのきりくす人づてならで聞かましものを

秋雨を

中務卿具平親王

ながめつゝ我が思ふことはひぐらしに軒の雫の絶ゆるよもなし

題しらす

大中臣能宣朝臣

水ぐきの中にのこれる瀧のこゑいとしも寒き秋のこゑかな

題しらす

小野小町

木がらしの風にもみちて人知れず憂き言の葉のつもる頃かな

述懐百首の歌よみ侍りけるとし紅葉を

皇太后宮大夫俊成

あらし吹く峯の紅葉の日にそへてもろくなりゆく我が涙かな

題しらす

崇徳院御歌

うたゝねは萩吹く風におどろけどながき夢路ぞ覺むるときなき

題しらす

宮内卿

竹の葉に風ふきよわる夕ぐれの物のあはれは秋としもなし

題しらす

和泉式部

夕ぐれは雲のけしきを見るからにながめじと思ふころこそつけ

暮れぬめり幾日をかくて過ぎぬらむ入相の鐘のつくくとして

○あすもやあらは 明日も長らへ
てあるならば。

○つゆ 告休一黃楊。

○ゆふつけ鳥 鷓。
○長きねむり 生死長夜の眠り。

○垂乳根 親。

○つれづれ 一本「つくづく」
詠むるをだに 年とるを詠めが
ちになつても。

○熊野 紀伊國。

○大峯 大和國。

○はぐみ みたてし 青てあけた。

○位山 飛騨國。位の昇進のこ
を云ひ懸く。

○あをたづねて 先祖の昇進の
先例をたづねて。

○子をおもふ 子の昇進しないこ
を思ふ。

西行法師

皇太后宮大夫俊成

式子内親王

和泉式部

大僧正行尊

土御門内大臣

皇太后宮大夫俊成

待たれつる入相のかねの音すなりあすもやあらば聞かむとすらむ

あかつきの心を

曉とつゆのまくらをそばだてて聞くもかなしきかねの音かな

百首の歌に

あかつきのゆふつけ鳥ぞあはれなる長きねむりを思ふまくらに

尼にならむと思ひ立ちけるを人のとめはべりければ

かくばかり愛きを忍びてながらへばこれよりまさる物をこそ思へ

題しらず

垂乳根の諫めしものをつれづれと詠むるをだに問ふ人もなし

熊野へまゐりて大峯へ入らむとて年頃やしなひ立てて侍りけるめのとの

許に遣はしける

あはれとてはぐみみたてしいにしへは世を背けとも思はざりけむ

百首の歌奉りし時

位山あとをたづねて登れども子をおもふ道になほ迷ひぬる

百首の歌よみ侍りけるに懷舊の歌

皇太后宮大夫俊成

○むかしだに 私の若かつた時に
でも。

○いとかりける 絲懸りける一
葉(イト)斯かりける。

○葉がく 葉をかける。

○消えはてね 消え果てよ。

○野分 秋から冬にかけて吹く烈
しい風。

○信太の森 「忍ぶ」を云ひ懸く。
信太は和泉國にあつて道貞は和泉
守なので云ふ。

○秋風 道貞のこを云ふ。
○うらみ 裏見一恨み。恨み顔は
君に見せまいと思ふの意味。

むかしだに昔と思ひし垂乳根のなほ戀しきぞはかなかりける

述懐百首の歌よみ侍りけるに

蜘蛛のいとかりける身のほどをおもへば夢のこゝちこそすれ

夕暮にくものいとはかなげに葉がくを常よりもあはれと見て

さゝがにの空にすがくもおなじごとと全き宿にも幾世かは經む

題しらず

ひかり待つ枝にかゝれる露のいのち消えはてねとや春のつれなき

野分したるあしたにをさなき人をだにとはざりける人に

あらく吹く風はいかにと宮城野のこ萩がうへを人のとへかし

和泉式部道貞にわすられて後ほどなく敦道親王に通ふと聞きてつかはし

うつろはでしばし信太の森を見よかへりもぞする葛のうら風

かへし

秋風はすこく吹けども葛の葉のうらみ顔には見えじとぞおもふ

病かぎりには覺えけるととき定家朝臣中將轉任の事申すとて民部卿範光が許

につかはしける

皇太后宮大夫俊成

○このひさふし 此の一節一子の一節(一事)。

○いまはのこゝろつくからに今は世を遁れようとの心がつくとき同時に。
○過ぐる月日 出家しようゝ月日を數へたことを云ふ。
○なほそむかるゝ 出家した上に更に世の厭はれる。

○名をたにもさは 名をでもそのまゝに。
○背くならひの 世を背いて出家する習慣が。
○世にあらはこそ 俗人在るならは。「こゝ一本ではや世」
○あなうの世や あゝ憂い世の中たなア。
○思はめ 一本「思はむ」
○こまる心 心のこまることか。
○かたみに 男女の仲のやうに互

小笹原かぜまつ露の消えやらでこのひとふしを思ひ置けかな
題しらず

前大僧正慈圓

世の中をいまはのこゝろつくからに過ぎにし方ぞいと戀しき世をいとふ心のふかくなるまゝに過ぐる月日をうち數へつゝひと方に思ひとりにし心にはなほそむかるゝ身をいかにせむなにゆるにこの世を深くいとふぞと人の問へかしやすく答へむ思ふべき我が後の世は有るか無きか無ければこそは此の世には住め
西行法師

世を厭ふ名をだにもさは留め置きて數ならぬ身の思出にせむ身のうさを思ひ知らでや止みなまし背くならひのなき世なりせば如何すべき世にあらばこそ世をも捨ててあなうの世やと更に思はめなに事にとまる心のありければ更にしもまた世のいとはしき
入道前關白太政大臣

昔よりはなれがたきは憂世かなかたみにしのぶ中ならねども
歎くこと侍りける頭大峯に籠ると同行どももかたへは京へ歸りねなど
申してよみ侍りける
大僧正行尊

○ありさないひそ 私が生きて居るに云ふなよ。

○寂しきにあるじとなりて寂しい所に出家してその主人となりて

○山田の晩稻 「おしこめて」の序

○賤の男のこりつむる 「しはし」を云ひ起す序。
○しはし 柴一暫し。

○たのみありて 來世の極樂往生の頼みがあつて。
○もぞかまし もぞかしく思ふであらう。
○憂き身の程を 私の憂き身の程を。
○よそに思はば 人がよそから思ふならは。

思ひ出でて若しも尋ぬる人もあらばありとないひそ定めなき世に
題しらず

數ならぬ身をなに故に恨みけむとてもかくてもすごしける世を
百首の歌奉りしに
前大僧正慈圓

いつか我み山の里の寂しきにあるじとなりて人に問はれむ

題しらず
俊頼朝臣

うき身には山田の晩稻おしこめて世をひたすらに恨みわびぬる
年頃修行の心ありけるを捨て難きこと侍りて過ぎけるに親などなくなり
て心やすく思ひ立ちけるころ障子にかきつけ侍りける
山田法師

賤の男の朝なくにこりつむるしはしの程もありがたの世や
題しらず
寂蓮法師

數ならぬ身は無きものになし果てつ誰が爲にかは世をも恨みむ
たのみありていま行末をまつ人やすぐる月日を歎かざるらむ
守覺法親王五十首の歌よませ侍りけるに
源師光

○月の入る方 西方淨土の方角。

○長らへま憂き 生き長へることも憂い。○ふる 經る。

○長らへば 生き長らへるならは○しのはれむ 懐かしまれるたらう。○うし見し世ぞ 過去に憂い見た世が却つて。

○この情 和歌の風流。○見し夢なくは 夢に見ないならは。○よそに聞かまし よそごとくに聞いてすまじたらうに。○おもふ 一本「こふる」。○心ならひに 心の習憤で。

題しらず

うき世をば出づる日ごとに厭へどもいつかは月の入る方をみむ

西行法師

なさけありし昔のみなほ忍ばれてながらへま憂き世にもふるかな

清輔朝臣

長らへばまた此の頃やしのばれむうしと見し世ぞいまは戀しき

寂蓮法師人々すゝめて百首の歌よませ侍りけるにいなびて熊野へ詣でける道にて夢に何事も衰へゆけどこの道こそ世の末にかはらぬものはあれ

なほこの歌よむべきよし別當湛快三位俊成に申すと見侍りて驚きながらこの歌を急ぎよみいだしてつかはしけるおくにかきつけ侍りける

西行法師

末の世もこの情のみかはらずと見し夢なくばよそに聞かまし

千載集撰び侍りける時ふるき人々の歌をみて

皇太后宮大夫俊成

行くするは我をもしのぶ人やあらむ昔をおもふ心ならひに

崇徳院に百首の歌奉りける無常歌

世の中を思ひつらねてながむればむなしきそらに消ゆるしら雲

百首の歌に

式子内親王

○暮る、間も待つべき世かは暮れる間でも待つことの出来る世であるかい。○嵐たつ 一本「嵐ふく」。○ながらふ 長柄「長らふ」。○葦のよ 「よ」に世を云ひ懸く

○風はやみ 風がはやいので。○はぎの 一本「はぎぞ」。○はかなさ 一本「はかなき」

○白露の 白露のやうな。○果てしなれば 果てがないのだから。「し」は助詞。

暮る、間も待つべき世かはあだし野の末葉の露に嵐たつなり

津の國におはして汀の葦を見給ひて

花山院御歌

津の國のながらふべくもあらぬかな短き葦のよにこそありけれ

題しらず

中務卿具平親王

風はやみ萩の葉ごとにおく露のおくれ先だつほどのはかなさ

題しらず

蟬 丸

秋風になびくあさむの末ごとにおく白露のあはれ世のなか

世の中はとてまかくてもおなじこと宮も藁屋も果てしなれば

新古今和歌集 卷第十九

神祇歌

○おいむ 老いむ。一本「生ひむ」

知るらめやけふの子の日のひめ小松おいむ末まで榮ゆべしとは

この歌は日吉の社司社頭のうしろの山にまかりて子の日して侍りける

夜人の夢に見えけるとなむ

なさけなく折る人つらしわが宿のあるじわすれぬ梅の立枝を

この歌は建久二年の春の頃筑紫へまかりけるもの安樂寺の梅を折りて侍りける夜の夢にみえけるとなむ

○建久 後鳥羽天皇の年號。

補陀落のみなみの岸に堂立てていまぞ榮えむ北のふぢなみ

この歌は興福寺の南圓堂造りはじめ侍りけるととき春日の奥のものと明神よみたまひけるとなむ

○寒き 一本「寒み」

夜や寒き衣やうすき片そぎの行きあひの閒より霜や置くらむ

住吉の御歌となむ

いかばかり年は経ぬとも住の江の松ぞふたゝび生ひかはりける

○かはりける 一本「替りぬる」

○霜や置くらむ この歌は社殿の擦れたのを歎いた歌かといふ。

○片そぎ 社の棟の上のぶちかへ

○かはりける 一本「替りぬる」

この歌はある人の住吉に詣でて人ならばとはましものをすみの江の松はいくたび生ひかはるらむとよみて奉りける御かへしとなむいへる

むつまじと君はしら浪みつ籬のひさしき世よりいはひ初めてき

伊勢物語に住吉に行幸の時おほん神現形したまひてとしるせり

ひと知れず今やくとちはやぶる神さぶるまで君をこそ侍て

この歌は待賢門院堀河大和の方より熊野へ詣で侍りけるに春日へ参るべきよしの夢を見たりけれど後に参らむと思ひてまかり過ぎにけるを

○かへり侍りけるに 都へ…。

かへり侍りけるに託宣したまひけるとなむ

道とほし程もはるかにへだたれり思ひおこせよ我もわすれじ

この歌はみちのくに住みける人の熊野へ三年詣でむと願を立てて参りて侍りけるがいみじう苦しかりければ今ふたゝびをいかにせむと歎き

て御前にふしたりける夜の夢にみえけるとなむ

思ふこと身にあまるまでなる瀧のしばしよどむをなに恨むらむ

この歌は身のしづめることを歎きてあづまの方へまからむと思ひたち

ける人熊野の御前に通夜してはべりける夢にみえけるとぞ

われ頼む人いたづらになしはてばまた雲わけてのほるばかりぞ

○われ頼む人 我を頼む人を。
○また雲わけてのほるばかりぞ 再び神の國へ戻るばかりだ。

○君はしら浪 白浪に「君は知つてくれ」の意味を云ひ懸く。

○みづ籬のひさしき世よりいはひ初めてき 拾遺集卷十九に「少女子が袖ふる山の瑞籬の久しき世より思ひそめてき」

○ちはやぶる 「神」の枕詞。

○か伊みたらしの水「影を見る」を「手洗川」に云ひ懸く。
○うつるばかりの心を忘れ 威應納受あることを知れ。
○忘れめや 忘れようかい。

○神日本磐余彦天皇 神武天皇のこゝ。但し此の歌は次の玉依姫の歌に入れ替つたものであらう。
○たまより姫 神武天皇の御母を傳へられる。
○しこゝ 来たこゝ。
○つひの一本「つひに」

○猿田彦 天孫降臨の時、天の八衢に迎へて導きした神だ云ふ。
○玉依姫 この歌は多分神武天皇の歌に入れ替つたのであらう。
○とびかけるあまのいは舟 天の磐舟につて簡速日命が大和國に天降つたことを、神武天皇が日向國から東征して大和國に入り宮を建てられたことに混じたものであらう。
○やまごかも 「かも」は助詞であらう。
○吹けば 一本「吹かは」

賀茂の御歌となむ

鏡にもかけみたらしの水のおもにうつるばかりの心とを忘れ
これまた賀茂に詣でたる人の夢に見えけるといへり

ありきつゝ來つゝ見れどもいさぎよき人のこゝろをわれ忘れめや

石清水の御歌といへり

西の海立つしら波のうへにしてなにごすらむかひの此の世を

この歌は稱徳天皇の御時和氣清麿を宇佐宮に奉りたまひけるととき託宣したまひけるとなむ

延喜六年日本紀竟宴に神日本磐余彦天皇

大江千古

白波にたまより姫のこしことはなぎさやつひのとまりなりけむ

猿田彦

紀淑望

ひさかたの天の八重雲ふりわけてくだりし君をわれぞむかへし

玉依姫

三統理平

とびかけるあまのいは舟たづねてぞ秋津島には宮はじめける

賀茂の社午日うたひ侍りける歌

やまとかもうみに嵐の西吹けばいづれの浦に御舟つなむ

○おく霜にの歌 古今集卷二十に「霜八度おけぬ枯れせぬ榊葉の立ち榮ゆべき神のきねかも」拾遺集卷十に「榊葉の香をかほはしみこめ來れば八十氏人ぞまごのせりける」
○こめて 求めて。

○みもすそ川 伊勢神宮の傍の川
○ちぎりし 皇祖神の天照大神と藤原氏の祖先神の天兒屋根命と
○みや川 「今日見る」を云ひ懸く

○いかにこたへまし 答へやうもなかつたらうに。

○かす知らずすむべき御代に 齋宮は限りもなく住みなさるべき御代だから。

○神路の山 伊勢神宮の山。
○こよみてぐら 豊御幣。
○しで 垂れかけるもの。

神樂をよみ侍りける

紀貫之

おく霜にいろもかはらぬ榊葉の香をやは人のとめて來つらむ

臨時祭をよめる

宮人のすれる衣にゆふだすきかけてこゝろを誰によすらむ

大將に侍りけるととき勅使にて大神宮に詣でてよみ侍りける

攝政太政大臣

神風やみもすそ川のそのかみにちぎりしことの末をたがふな

同じ時外宮にてよみ侍りける

藤原定家朝臣

契りありて今日みや川の本綿かづら長き世までもかけて頼まむ

公繼卿公卿勅使にて大神宮に詣でて歸り上り侍りけるに齋宮の女房の中より申し送りける

讀人しらず

うれしさも哀れもいかに答へましふる里人に問はれましかば

かへし

春宮權大夫公繼

神風や五十鈴川なみかす知らずすむべき御代にまたかへり來む

大神宮の歌の中に

太上天皇

ながめばや神路の山に雲消えてゆふべの空を出でむ月かけ

神風やとよみてぐらになびくしで懸けてあふぐといふも畏し

題しらす

西行法

○御影かな 徳の意味を云ひ懸く

宮ばしら下つ岩根にしきたてつゆも曇らぬ日の御影かな
かみぢ山月さやかなるちかひありて天の下をば照らすなりけり
伊勢の月讀の社に参りて月を見てよめる

○わしの高嶺 天竺の靈鷲山。
○かはやばらぐる 佛が光を和伊て神として現はれる。つまり本地垂迹説の信仰である。

さやかなるわしの高嶺の雲居よりかけやはらぐる月よみの森
神祇の歌とよめる

○やはらぐる光 老子に「和光同塵」

やはらぐる光にあまるかけなれや五十鈴河原のあきの夜の月
公卿勅使にてかへり侍りける壹志のむまやにてよみ侍りける
中院入道右大臣

○壹志 伊勢國壹志郡。

立ちかへりまたもみまくのほしきかな御裳濯川の瀬々のしら波
入道前關白の家の百首の歌よみ侍りけるに
皇太后宮大夫俊成

○すめ 澄めし住め。

神風や五十鈴の川の宮ばしら幾千世すめと立てはじめけむ

○玉串の葉 櫛の葉。

かみかぜや玉串の葉を取りかざし内外の宮に君をこそいのれ

○内外の宮 内宮と外宮。

五十首の歌奉りし時

越前

かみかぜや山田のはらの榊葉にころのしめを懸けぬ日ぞなき

社頭納涼といふことを

大中臣明親

○またきに また早いのに。
○したついはね 「秋の聲がする」意味を「下つ岩根」に云ひ懸く。

五十鈴川そらやまたきに秋の聲したついはねの松のゆふかぜ
香椎の宮の杉をよみ侍る

讀人しらす

○香椎の宮 筑前國粕屋郡。

ちはやぶる香椎の宮のあや杉は神の御そぎに立てるなりけり

○御そぎ 「そぎ」は家屋を葺くために薄くそいた板のことであらう。神體を作る木とする人もある

八幡宮の權官にて年久しかりけることを恨みて御神樂の夜参りて榊に結

○權官 副官のやうなもの。

びつけ侍りける

法印成清

○いふかひはなけれども 正官になれる見込みがないので。

榊葉にそのいふかひはなけれどもかみに心をかけぬ間ぞなき

周防内侍

○みたらし 「見る」を云ひ懸く。手洗川は、賀茂神社の傍を流れる川。

年をへて憂き影をのみみたらしのかはる世もなき身をいかにせむ

○文治 後鳥羽天皇の年號。

文治六年女御入内の屏風に臨時祭かける所をよみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

○入内 宮中に御輿入れのこと。

月さゆるみたらし川にかけ見えて氷にすれるやまあるの袖

○氷にすれるやまあるの袖 氷に摺つたやうに見える山麓(小忌衣)の袖。

社頭雪といふ心をよみ侍りける

按察使公通

○たがすの宮 山城國葛野郡。

君をいのる心のいろを人とはばたがすの宮のあけの玉がき

前大僧正慈圓

○あけの玉がき 朱の玉垣のやうに赤い心だの意味。

みあれ 賀茂神社の四月中の申の日に行はれた祭事。

○跡たれし 本地の佛が神と垂迹した。

跡たれし神にあふひのなかりせばなに頼みをかけてすぎまし

賀茂重保

○あふひ 逢ふ日。葵。

○河上の神 貴布禰社は賀茂川の川上なので斯う云ふ。

○せみの小河 賀茂川の上流。

○辨 太政官の職員。
○春日祭 二月上旬の申の日に
行はれた。

○しでに波立つ 川風にしでの靡くのが波の立つやうに見えること

○あめの下みかさ 笠の縁で「雨の下」を云ひ懸く。

○おさろの道 荆棘の道。大臣を
輦路といふので大臣の末の意味。
○うもれ水 沈淪する自身をた
ふ。

○すゑだに せめて我が末孫に
も。

○神をしほ「神も惜しむ」に「小
鹽山」を云ひ懸く。

○まつ 待つ。松。
○かへる 色の薄くなることを云
ふ。

社司ども貴布禰に参りて雨乞し侍りけるいにてよめる

賀茂 幸平

おほみ田のうるほふばかりせきかけてるせきにおとせ河上の神

鴨 長明

石川やせみの小河のきよければ月も流れをたづねてぞすむ

辨に侍りけるととき春日祭に下りて周防内侍につかはしける

中納言 資仲

萬代をいのりぞかくるゆふだすき春日のやまの嶺のあらしに

文治六年女御入内の屏風に春日祭

入道前關白太政大臣

けふまつる神のこゝろやなびくらむしでに波立つさほの河風

家に百首の歌よみ侍りけるととき神祇の心を

あめの下みかさの山の陰ならでたのむかたなき身とは知らずや

皇太后宮大夫俊成

春日野のおどろの道のうもれ水すゑだに神のしるしあらはせ

大原野の祭に参りて周防内侍につかはしける

藤原 伊家

千世までもこゝろして吹けもみぢ葉を神をしほの山おろしの風

最勝四天王院の障子に小鹽の山かきたる所

前大僧正慈圓

をしほ山神のしるしをまつの葉に契りし色はかへるものは

○やはらぐる影 垂跡した神。
○もとの光 本地である佛。

○七のやしろ 日吉山王七社。大
宮、二宮、聖眞子、客人、大禰師、三
宮、八王子を云ふ。

○六の道 地獄、餓鬼、畜生、修羅、
人間、天上の六道。

○みつの濱 「願ひを満つ」に「御
津の濱」を云ひ懸く。

○北野 菅原道眞を祭る。

○心づくし 「心盡し」に「筑紫」
（道眞の配流地）を云ひ懸く。

○見るからに 見るにつれて。

○かひ 映し致。

○みなれぎをさすが 「水馴樟を
さす」に「さすが」を云ひ懸く。
○鹽屋の王子 熊野九十九王の一

日吉社に奉りける歌の中に二宮を
やはらぐる影ぞふもとにくもりなきもとの光は峯にすめども
迷懷の心を

わが頼む七のやしろのゆふだすきかけても六の道にかへすな
おしなべて日吉のかげは曇らぬに涙あやしき昨日けふかな
もろ人のねがひをみつの濱風にこゝろすしきしでの音かな
北野によみて奉りける

さめぬれば思ひあはせて音をぞなく心づくしのいにしへの夢
熊野へ詣で給ひける道に花のさかりなりけるを御覽じて
咲きにほふ花のけしきを見るからに神のこゝろぞそらに知らるゝ
熊野に参りて奉り侍りし
白河院御歌

岩にむす苔ふみならずみ熊野の山のかひあるゆく末もがな
新宮に詣づとて熊野川にて
太上 天皇

熊野川くだす早瀬のみなれぎをさすがみなれぬ浪のかよひ路
白河院熊野にまうで給へりけるに御供の人々鹽屋の王子にて歌よみ侍り
けるに
徳大寺左大臣

○こゝろともがな 心であつて欲しい。
○岩代の王子 これも九十九王の一。

立ちのほるしほやのけむり浦風になびくを神のこゝろともがな
熊野へ詣で侍りしに岩代の王子に人々の名など書きつけさせてしばし侍りしに拜殿のなげしに書きつけ侍りし歌
讀人しらず

いはしらの神は知るらむしるべせよ頼むうき世の夢のゆく末

熊野の本宮焼けて年の内に遷宮侍りしに参りて
太上天皇

契りあればうれしきかかる折にあひぬ忘るな神もゆく末のそら

加賀守にて侍りけるとき白山に詣でたりけるを思ひ出でて日吉の客人の
左京大輔顯輔

宮にてよみ侍りける

年經ともこしの白山わすれずばかしらの雪をあはれとも見よ

一品聰子内親王住吉にまうでて人々歌よみ侍りけるによめる
藤原通經

すみよしの濱松が枝に風吹けば波のしらゆふかけぬ聞ぞなき

奉幣使に住吉に参りて昔住みけるとまりの荒れたりけるをよみ侍りける
津守有基

住みよしと思ひし宿はあれにけり神のしるしをまつとせしまに

ある所の屏風の繪に十一月神祭る家の前に馬にのりて人のゆく所を
大中臣能宣朝臣

○住みよしと「住吉」に「住みよ
いと」の意味を云ひ懸く。
○まつ 松一待つ。

○聞ぞ 一本「日ぞ」

○うれしきかかる折 斯かる嬉し
き折。
○白山 加賀國。

○かれず 葉の枯れず一人の離れ
ず。
○延喜 醍醐天皇の年號。

榊葉の霜うち拂ひかれずのみすめとぞいのる神のみまへに

延喜の御時屏風に夏神樂の心をよみ侍りける
貫之

河やしろしのに折りはへほす衣いかにほせばか七日ひざらむ

新古今和歌集 卷第二十

釋教歌

○しめぢが原 下野國都賀郡。さしも草の多いので名高い。
○なにかは 一本「何さか」

なほ頼めしめぢが原のさしも草われ世の中にあらむかぎりは

なにか思ふなにかはななく世の中はたゞ朝顔の花のうへのつゆ

此の歌は清水觀音の御歌となむいひつたへたる

智縁上人伯耆の大山に參りて出でなむとしける曉夢にみえける歌

やま深く年ふる我もあるものをいづちか月のいでて行くらむ

難波のみつの寺にて葦の葉のそよぐを聞きて

葦そよぐ鹽瀬の浪のいつまでかうき世のなかにうかびわたらむ

比叡山中堂建立の時

阿耨多羅三藐三菩提の佛たちわが立つ杣に冥加あらせ給へ

入唐の時の歌

法の舟さして行く身ぞもろくのかみも佛もわれをみそなへ

菩提寺の講堂の柱に蟲のくひたる歌

行基菩薩

傳教大師

智證大師

○中堂 根本中堂。

○阿耨多羅三藐三菩提 無上正遍智。佛の位を云ふ。

○杣 材木を伐り出す山。

○冥加 冥々の加護。

○みそなへ 照覽あれ。

○しるべあるとき 見佛開法の時

○なみだの雨 感涙。

○御手にかくる絲 五色の絲を本尊の手にかけて、臨終の時にその絲を持つて來迎引導に預る事をするその絲。

○知るも知らぬも 知る人をもも知らない人をもも。

○わたつ海のの歌 經に「皆見龍女忽然之間變成男子」の趣。
○かすならぬの歌 經に「我等敬信當者忍辱爲說是經故忍此諸難事我不愛身命但惜無上道我等於來世護持佛所囑」の趣か。
○むらさきの雲 櫻の花が紫の雲に見えろのを云ふ。
○あふち「逢ふ」を「櫻」に云ひ懸く。

しるべあるときにだに行け極樂の道にまどへる世のなかの人

みたけの笹の岩屋に籠りてよめる

寂寞のこけの岩戸のしづけきになみだの雨のふらぬ目ぞなき

臨終正念ならむことを思ひてよめる

南無阿彌陀佛の御手にかくる絲のをはり亂れぬ心ともがな

題しらず

われだにもまづ極樂にうまれなば知るも知らぬも皆むかへてむ

天王寺の龜井の水を御覽じて

にこりなき龜井の水をむすびあけて心の塵をすゝぎつるかな

法華經二十八品の歌人々によませ侍りけるに提婆品の心を

わたつ海の底よりきつる程もなく此の身ながらに身をぞ極むる

勸持品の心を

かすならぬ命はなにか惜しからむ法とく程をしのぶばかりぞ

五月ばかりに雲林院の菩提講に詣でてよみ侍りける

むらさきの雲のはやしを見わたせば法にあふちのはな咲きにけり

日藏上人

法圓上人

僧都源信

上東門院

法性寺入道前關白太政大臣

大納言齊信

肥後

○ちる花 佛の人滅に喩ふ。

○ながれし「し」は助詞。

涅槃經讀み侍りけるとき夢にちる花に池の氷も解けぬなり花吹きちらす
春の夜の空とかきて人の見せ侍りければ夢の中にかへしすと覺えける歌
谷川のながれし清く澄みぬればくまなき月の影もうかびぬ
述懐の歌の中に

前大僧正慈圓

ねがはくはしばし闇路にやすらひてか、けやせまし法の燈火

とく御法みりきくの白露夜はおきてつとめて消えむことをしぞ思ふ

極樂へまだ我が心ゆきつかずひつじの歩みしばしとまれ

觀心如月輪若在輕霧中の心を

權僧正公胤

我がこゝろなほはれやらぬ秋霧にほのかに見ゆるあり明の月

家に百首の歌よみ侍りけるとき十界の心をよみ侍りけるに緣覺の心を

おく山にひとりうき世はさとりにき常なきいろを風にながめて
心經の心をよめる
攝政太政大臣

色にのみそみし心のくやしきを空しと説ける法のうれしさ
小侍

攝政太政大臣の家の百首の歌に十樂の心をよみ侍りけるに聖衆來迎樂
寂蓮法師

○色にのみの歌 經に「色即是空」
○聖衆來迎樂 十樂の一。

○開路 娑婆世界。
○か、けやせまし 衆生を照らし導く爲に。
○きく 聞く、一菊。
○夜はおきて 夜動行して。
○つとめて 勤めて「明朝（ツトメテ）」
○ひつじの歩み 摩耶經の偈に「譬如下旛陀羅_羊就_羊居所_一歩々近_死地_人命亦如_是」
○觀心如月輪云々 金剛界儀軌の文。
○十界 佛、菩薩、緣覺、聲聞、天、人、阿修羅、餓鬼、畜生、地獄。
○緣覺 自利ばかりで利他の功德がないので獨覺とも云ふ。
○常なきいろ 無常の色。

○琴の音 來迎の菩薩の音樂。

○おくれさきたつ恨みやはある 極樂には死に後れ先立つこいふ恨みはないの意味。

○ふかきえに 深き江に「深き縁」
○ひくらめ 經に「世々生々所思智識隨心引接」と見える。

○いづくにももの歌 方便品に、「十方佛土中唯一乘法無二無三。」又「如風於空中一切無障礙。」

○思ふなよ 憂世を出て宿つた所をこゝはかりたと思ふなよ。

○鷲の山 靈鷲山。

○法の道ならで 法の道以外に。
○かへらぬ宿 壽量品の功德で衆生即佛の位に住してそれを去ることのないこと。不退地。
○おしなべての歌 經に「聞名及見見身心念不空過能滅諸有苦。」
ある。心を空に、念を藤に、業雲を菩薩の威應に喩ふ。

むらさきの雲路にさそふ琴の音にうき世をはらふ峯のまつかぜ

蓮花初開樂

これやこのうき世のほかの春ならむ花の戸ほそのあけほのの空

快樂不退樂

春秋もかぎりぬ花に置く露はおくれさきたつ恨みやはある

引接結緣樂

立ちかへり苦しき海におくあみもふかきえにこそ心ひくらめ

法華經二十八品の歌よみ侍りけるに方便品唯一乘法の心を

前大僧正慈圓

いづくにも我が法ならぬ法やあると空吹く風にとへど答へぬ

化城喻品化作大城

思ふなようき世のなかを出で果てて宿る奥にもやどはありけり

分別功德品或住不退地

鷲の山けふきく法のみちならでかへらぬ宿に行く人ぞなき

普門品心念不空過

おしなべてむなしき空と思ひしに藤咲きぬればむらさきの雲

水渚常不満といふ心を

崇徳院御歌

おしなべて憂身はさこそなるみ瀉みちひる汐のかはるのみかは

先照高山

朝日さすみねのつきはめぐめどもまだ霜ふかし谷のかけ草

家に百首歌よみ侍りけるととき五智の心を妙觀察智

入道前關白太政大臣

底清く心のみづを澄まさずばいかさとりのはちすをも見む

勸持品

正三位經家

さらすとて幾世もあらじいざやさは法にかへたるいのちと思はむ

法師品加刀杖瓦石念佛故應忍の心を

寂蓮法師

深き夜のまどうつ雨に音せぬはうき世を軒のしのぶなりけり

五百弟子品内祕菩薩行の心を

前大僧正慈圓

いにしへの鹿なく野邊のいほりにも心の月は曇らざりけり

人々勸めて法文百首の歌よみ侍りけるに二乗但空智如螢火

寂然法師

道のべの螢ばかりをしるべにてひとりぞ出づるゆふやみの空

菩薩清涼月遊於畢竟空

雲はれてむなしき空にすみながらうき世のなかをめぐる月かけ

梅檀香風悅可衆心

○朝日さすの歌 華嚴經に「先照高山次照平地次照幽谷」日の出るのを如來の出現に喩ふ。
○さとりのはちす 妙觀察智を蓮花智とも云ふので。

○さらすとて 一本「さらすとて」
○法師品 經に「若説此經時有人惡口罵加刀杖瓦石念佛故應忍。刀杖瓦石を擲うつ雨、應忍を忍草に喩ふ。

○鹿なく野邊 釋迦が鹿野園で阿含經を説いて、富樓那尊者が小乘空を悟つて聲聞となり、後法華經に至つて、其の悟りは外は聲聞だが内には菩薩の行を秘したのたま説いた趣。
○道のべの歌 小乗である二乘（聲聞、緣覺）は暗夜の螢光のやうだが先づ初めに小乘を悟る趣。
○雲はれての歌 菩薩を月影に譬へ、空に遊ぶが衆生に交はる意味に。
○すみ 澄みし住み。

○吹く風にの歌 釋迦が法華經を説かうした時に衆生の心がなごみなく悦ばしく覺えた瑞相の趣。
○作是教云々 壽量品の文。
○やみ 一本「やま」

○此日已過云々 出離經の文。

○かりは 狩場。

○背かずは 世を背いて遁世しないならば。
○合會有別離 涅槃經に「夫盛者有衰合會有別離。」
○聞名云々 無量壽經に「其佛本願力聞多欲往生皆悉到彼。」
○君がかり 君の許に。
○いつか 一本「いづる」
○いきの松 行きし生（イキ）の松（筑前國）。
○心づくしに 心盡しし筑紫。
○心懷戀慕云々 壽量品の文。
○別れにしそのおもかけ 入滅後の佛の面影。
○十戒 十惡を犯さない戒め。

ふく風に花たちばなや匂ふらむ昔おほゆる今日のそらかな

作是教已復至他國

やみふかき木の下ごに契りおきて朝たつきりのあとの露けさ

此日已過命即衰滅

けふ過ぎぬ命もしかとおどろかす入相のかねの聲ぞかなしき

悲鳴啾咽痛戀本羣

草深きかりばの小野を立ち出でて友まどはせる鹿ぞ鳴くなる

棄恩入無爲

背かずばいづれの世にかめぐり逢ひて思ひけりとも人に知られむ

合會有別離

あひみても嶺にわかるゝ白雲のかゝるこの世の厭はしきかな

聞名欲往生

おとに聞く君がりいつかいきの松まつらむものを心づくしに

心懷戀慕渴仰於佛

別れにしその面かけのこひしきに夢にし見えよ山の端の月

十戒の歌よみ侍りけるに不殺生戒

素覺法師

寂然法師

源季廣

寂然法師

○深きに沈むいさりせで 深い罪に沈む殺生をしないで。

○磯がくれ 人に忍びかくれて。○しらなみ 漢の時白波さいふ所から賊がおこつた事から、盗人のこゝを白波の賊と呼んだ。

○重き 罪の重(女犯のこゝ)。○つま 妻一様。

○なさけ 「酒」を云ひ懸く。

○十如是 如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟。

○渡すべき 苦海を渡し濟ふこゝ。○ちかひ 菩薩の誓願。

○思ひこし 娑婆にゐて思ひ來つた。今は極樂に往生したので。

わたつ海の深きに沈むいさりせでたもつかひある法を求めよ

不偷盜戒 うき草のひと葉なりとも磯がくれおもひなかけそ沖つしらなみ

不邪淫戒 さらぬだに重きが上のさよ衣わがつまならぬつまなかさねそ

不酤酒戒 花のもと露のなさけはほどもあらじゑひなすゝめそ春の山かぜ

入道前關白の家に十如是の歌よませ侍りけるに如是報 二條院讚岐

うきもなほ昔のゆゑと思はずばいかにこの世を恨み果てまし 待賢門院中納言人々に勸めて二十八品の歌よませ侍りけるに序品廣度諸

衆生其數無有量の心を 皇太后宮大夫俊成

渡すべきかすもかざらぬ橋ばしら如何に立てけるちかひなるらむ 美福門院の極樂六時讚の繪に書かるべき歌奉るべきよし侍りけるによみ

侍りける時に大衆法を聞きて彌歡喜瞻仰せむ いまぞこれ入日をも思ひこし彌陀のみくくの夕暮のそら 曉至りて浪の聲金の岸によするほど

○いにしへの 娑婆にゐた昔の。

○毎日晨朝云々 地藏延命經に「毎日晨朝入於諸定遊化六道拔苦與樂。」

○行かむ方を知らねば 惡趣の中のでこに行くかを知らない。

○たまかけし衣のうら 衣裏寶珠の意味。

○此身如夢 方便品「此身如夢爲虛妄見。」

○今日の煙 佛の入滅したのを梅樫の薪で煙にしたこと。○おもひいる日「思ひ入る」に「入る日」を云ひ懸く。

○西へ行くしるべ 西方淨土へ行く道しるべ。○月影 上人に喻ふ。○空だのめ 待ちぼうけ。

いにしへの尾上のかねに似たるかな岸うつ浪のあかつきの聲

百首の歌の中に毎日晨朝入諸定の心を 式子内親王

しづかなる曉ごとに見わたせばまだふかき夜の夢ぞかなしき 選子内親王

發心和歌集の歌普門品種々諸惡趣 僧都源信

逢ふことを何處にてとか契るべき憂き身の行かむ方を知らねば 赤染衛門

五百弟子品の心を 相摸

たまかけし衣のうらをかへしてぞおろかなりける心をば知る 伊勢大輔

維摩經十喻の中に此身如夢といへる心を 相摸

夢や夢現や夢とわかぬかないかなる世にか覺めむとすらむ 伊勢大輔

二月十五日の暮方に伊勢大輔がもとへ遣はしける 相摸

つねよりも今日の煙のたよりにや西をはるかにおもひやるらむ 伊勢大輔

かへし 伊勢大輔

けふはいと涙にくれぬ西の山おもひいる日の影をながめて 伊勢大輔

西行法師をよび侍りけるにまかるべきよしは申しながらまうで來て月の 待賢門院堀河

あかかりけるに門の前を通ると聞きてよみて遣はしける 待賢門院堀河

西へ行くしるべとおもふ月影の空だのめこそかひなかりけれ 待賢門院堀河

かへし

たちいらで雲間をわけし月影は待たぬけしきや空にみえけむ

西行法師

○待たぬけしき 自分を待たない様子。
○即往生云々 法華經藥王品に「若有女人聞是經典如說修行於此命終即往安樂世界。」とある。

人の身まかりける後結縁經供養しけるに即往生安樂世界の心をよめる

瞻西上人

むかし見し月のひかりをしるべにてこよひや君が西へ行くらむ

勸心をよみ侍りける

西行法師

闇はれてころの空に澄む月は西の山邊やちかくなるらむ

○闇はれて 煩惱の闇が暗れて。
○ころの空に澄む月 心月輪。
○西の山邊やちかくなるらむ 極樂往生の期が近くなるのたう。

異本

卷第二

春歌下

題しらず

古里にはなは散りつゝみ吉野の山のさくらはまださかさなり

中納言家持

在春雨下花の香に上

題しらず

こひしくばかたみにせむと我が宿にうるし藤浪いまさかりなり

赤人

在足曳下かくてこそ上

卷第三

夏歌

○さかず 一本「さかり」

○昔をかけて思へみや 昔のこゝ
をも兼ねて思へみや

時鳥の心をよみ侍りける

顯昭法師

ほとゝぎす昔をかけて思へとや老のねざめにひと聲ぞする

在有明下過ぎにけり上

卷第五

秋歌下

惠慶法師

○高砂 播磨國。

題しらず

高砂の尾のへに立てる鹿の音にことのほかにも濡るゝ袖かな

在妻こふる下深山邊上

卷第二 (又一本)

春歌下

太上天皇

大神宮に百首の歌奉りし中に

○ふる 經る一降る。
○ながめ 詠め一長雨。
○しほの戸「ながめし」の意味を
柴の戸に云ひ懸く。

いかにせむ世にふるながめしほの戸にうつろふ花の春の暮れがた
在赤人春雨はいたくな降りそ下

新古今和歌集 終

昭和四年三月二十日印刷
昭和四年三月廿二日發行

註新古今和歌集 (定價一圓五十錢)

不許複製



校註者

東京府下瀧野川町西ヶ原一〇二番地
佐伯常麿

發行者

東京市麴町區內幸町一丁目六番地
中塚榮次郎

印刷者

東京市本所區番場町四番地
井上源之丞

印刷所

東京市本所區番場町四番地
凸版印刷株式會社本所分工場

發行所

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

電話銀座 二七三八三番
振替東京 五二二九八番

東京女子高等師範教授 佐伯常麿先生校註 校註 古事記全 原文及び
假名混文 送料 一圓四十錢

日本女子大學教授 石川佐久太郎先生校註 校註 竹取物語全 送料 三圓十錢

東京女子高等師範教授 佐伯常麿先生校註 校註 大和物語全 送料 七圓十錢

東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生校註 校註 堤中納言物語全 送料 五圓十錢

東京帝大助教授 植松安先生校註 校註 土佐日記全 送料 三圓十錢

日本女子大學教授 石川佐久太郎先生校註 校註 蜻蛉日記全 送料 一圓十錢

東洋大學教授 長連恆先生校註 校註 紫式部日記全 送料 五圓十錢

東京高等師範教授 玉井幸助先生校註 校註 更級日記全 送料 四圓十錢

國學院大學教授 山崎麓先生校註 校註 徒然草全 送料 八圓十錢

同 校註 方丈記全 附彰考館
本方丈記 送料 三圓十錢

東京女子高等師範教授 佐伯常麿先生校註 校註 平家物語全 送料 二圓十錢

東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生校註 校註 落窪物語全 送料 一圓二十錢

中央大學教授
沼波守先生校註

校註源

氏物

語一

自桐壺
至明石

定價一圓四十錢
送料十八錢

同

校註源

氏物

語二

自滯標
至藤裏葉

定價一圓五十錢
送料十八錢

同

校註源

氏物

語三

自若菜
至雲隱

定價一圓四十錢
送料十八錢

同

校註源

氏物

語四

自匂宮
至夢浮橋

定價一圓七十錢
送料十八錢

日本女子大學教授
石川佐久太郎先生校註

校註大

鏡全

定價一圓三十錢
送料十八錢

同

校註增

鏡全

定價一圓三十錢
送料十八錢



